久富鳥居遺跡

福岡県筑後市大字久富所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書 第13集

1994

筑後市教育委員会

久富鳥居遺跡

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

筑後市教育委員会

序

筑後市は現在、農業と商工業が調和した田園工業都市をめざした街づくりに取り組んでいますが、近年の不況により開発の波も静かになりました。この煽りを受け、開発に伴う埋蔵文化財の審査の件数も一時は減ってはいたものの、少しづつではありますが、最近は増加傾向にあります。

この度、報告致します「久富鳥居遺跡」はこういった状況の中で建売分譲住宅工事に伴い、埋蔵文化財発掘調査を実施し、まとめたものであります。

本書が、地域の歴史研究や文化財の保護、啓発に広く活用していただければ幸いです。

なお、調査を実施するにあたりまして、株式会社ミサワホーム南福岡から多大なご理解・ご協力を賜りここに厚くお礼申し上げるとともに、連日猛暑の中、調査に参加されました作業員の方々に感謝を申し上げる次第であります。

平成6年3月31日

筑後市教育委員会

教育長　森田基之

例　言

1．本書は、株式会社ミサワホーム南福岡支店から建売分譲住宅工事に係る埋蔵文化財発掘調査の依頼を受けて、筑後市教育委員会が平成5年度に実施した久富鳥居遺跡（筑後市大字久富1533-1外所在）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は平成5年9月1日から11月5日まで実施し、開発対象面積は約2,400㎡、調査面積約2,000㎡である。

3．検出遺構の実測及び写真撮影は、小林勇作・大島真一郎・馬場敦子、出土遺物の実測は、平塚あけみの協力を得た。出土遺物の写真撮影及び製図は、平塚・小林が行った。また、検出遺構の空中写真撮影は、（有）空中写真企画に委託した。

4．本書に示す方位は、すべて座標北（G.N）を指す。（国土調査法第II座標系による）

5．本書の2.遺跡の位置と環境は大島真一郎、その他の執筆、編集は小林が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに……1

2．遺跡の位置と環境……2

3．遺構の調査……4

(1) 検出遺構

住居跡……4

掘立柱建物跡……4

土壙……10

井戸……14

溝……14

(2) 出土遺物

住居跡出土土器……18

掘立柱建物跡出土土器……24

土壙出土土器……25

溝出土土器……26

ピット出土土器……28

その他の遺物……28

4．おわりに……30

挿 図 目 次

第１図　周辺の遺跡分布図(1/25,000)……3
第２図　久富鳥居遺跡遺構全体図(1/200)……（折り込み）5
第３図　SI030実測図(1/40)……（折り込み）6
第４図　SB110・120・160実測図(1/80)……7
第５図　SB130実測図(1/80)……8
第６図　SB140・150実測図(1/80)……（折り込み）9
第７図　SB150土層断面図……（折り込み）9
第８図　SB170実測図(1/80)……10
第９図　SB170・SP076土層断面図(1/40)……10
第10図　SK020・068実測図(1/40)……11
第11図　SK028実測図(1/40)……12
第12図　土壙実測図①(1/40)……13
第13図　土壙実測図②(1/40)……15
第14図　井戸実測図(1/40)……16
第15図　SI030出土土器実測図①（1/3)……19
第16図　SI030出土土器実測図②（1/3)……20
第17図　SI030出土土器実測図③（1/3)……21
第18図　SI030出土土器実測図④（1/3)……22
第19図　SI030出土土器実測図⑤（1/3)……23
第20図　SK129出土土器実測図（1/3)……24
第21図　掘立柱建物・土壙出土土器実測図（1/3)……25
第22図　溝・ピット出土土器実測図（1/3)……27
第23図　鉄製品・石製品実測図(1/2)……29

1. はじめに

「久富鳥居遺跡」は筑後市の北西部、鬼の修正会で有名な熊野神社の南約50mの丘陵上にあり、過去の分布調査や発掘調査などにより遺跡周辺は埋蔵文化財が存在することが予測されていた。

筑後市教育委員会は平成5年4月28日、株式会社ミサワホーム南福岡支店から建売分譲住宅造成工事予定地の試掘調査依頼を受け、これにより5月10日重機による試掘を行った。その結果、埋蔵文化財を認めたため開発関係者と協議し、平成5年9月1日から調査を開始することとなった。調査は足掛け2カ月に渡って行い、終了は11月5日であった。この間の10月21日は気球による空中写真撮影を実施し、整理作業及び報告書作成については、調査終了後、文化財整理室にて随時行った。

発掘調査及び整理の関係者は次の通りである。

発掘調査

調査主体	筑後市教育委員会	
総　括	教育長	森田基之
	部　長	橋本益夫
	社会教育課長	下川雅晴
	社会教育係長	松永盛四郎
	技　師	永見秀徳
		小林勇作（調査担当）

発掘調査参加者（順不同、敬称略）

愛川一枝　井村静香　大石新一　大島真一郎　小野清次　小野ミノブ
加藤礼子　蒲地京子　木下ハキノ　田島好江　堤ミツヨ　寺崎タクミ
中沢やよい　馬場敦子　矢次和枝

整理作業参加者（順不同、敬称略）

平塚あけみ（整理補助員）　野間口靖子　桜木千鶴　湊まど香　大島真一郎

2．遺跡の位置と環境

久富鳥居遺跡が所在する筑後市は、福岡県南部、筑後平野のほぼ中央を占め、市の中央部を南北に国道209号線、JR鹿児島本線が縦断し、東西には国道442号線が横断する。

東は耳納山地の南端裾野より派生した八女丘陵が八女市山内から西方に伸延し、当遺跡を含む地区を経て丘陵末端部の三潴町西牟田にいたる東西約十数kmの細長い帯状の中位段丘を呈す。段丘上では微起伏による開析谷も見られ、比較的緩やかな変化を示す。八女丘陵の起点付近には前方後円墳が数百基存在し、一連の八女古墳群を形成する。その流れを汲んで当市にも小規模ながら数基の古墳が確認されている。市北部一条に石人山古墳、近接する前津に欠塚[註-1]古墳、共に前方後円墳で造り出し構造をもつ。北部西牟田には円墳の瑞王寺[註-2]古墳がある。北部一帯には古墳時代中期の田佛[註-3]遺跡、その南部には蔵数[註-4]遺跡群が存在し、その一角には弥生時代中期から古墳時代後期にかけての集落遺跡、森の木遺跡が存在する。同じ丘陵面を東上すると、奈良時代前期から中期にかけての前津中の玉[註-5]遺跡が確認されている。

近世において、羽犬塚は坊津街道の宿場町としての繁栄を経て、現在まで貫線は交通の要衝として、その命脈を保ち続けている。

市中央付近には山ノ井川を直下に見下ろす中位段丘上端に弥生から江戸時代にかけての複合遺跡、若菜遺跡があり、400軒を越す竪穴住居が確認されている。更に緩やかに西下した低位段丘上には高江[註-6]遺跡が存在する。

この地点より北方眼前の中位段丘面に当遺跡は位置し、周囲は田畑耕作の風景が見られる。この微高地の一角には8世紀後期創建の坂東寺、12世紀中期勧請にかかる熊野[註-7]神社を控えている。市南部の主な遺跡としては、縄文時代の集落遺跡である。裏山[註-8]遺跡や弥生時代前期から中期にかけての狐塚[註-9]遺跡、弥生時代から中世にかけての榎崎[註-10]遺跡、井田西中野遺跡が点在する。

註1：筑後市文化財報告書「欠塚古墳」第8集　筑後市教育委員会 1983

註2：筑後市文化財報告書「瑞王寺古墳」第3集　筑後市教育委員会 1984

註3：筑後市文化財報告書「田佛遺跡」第5集　筑後市教育委員会 1988

註4：筑後市文化財報告書「蔵数遺跡群」第6集　筑後市教育委員会 1990

註5：筑後市文化財報告書「前津中の玉遺跡」第4集　筑後市教育委員会

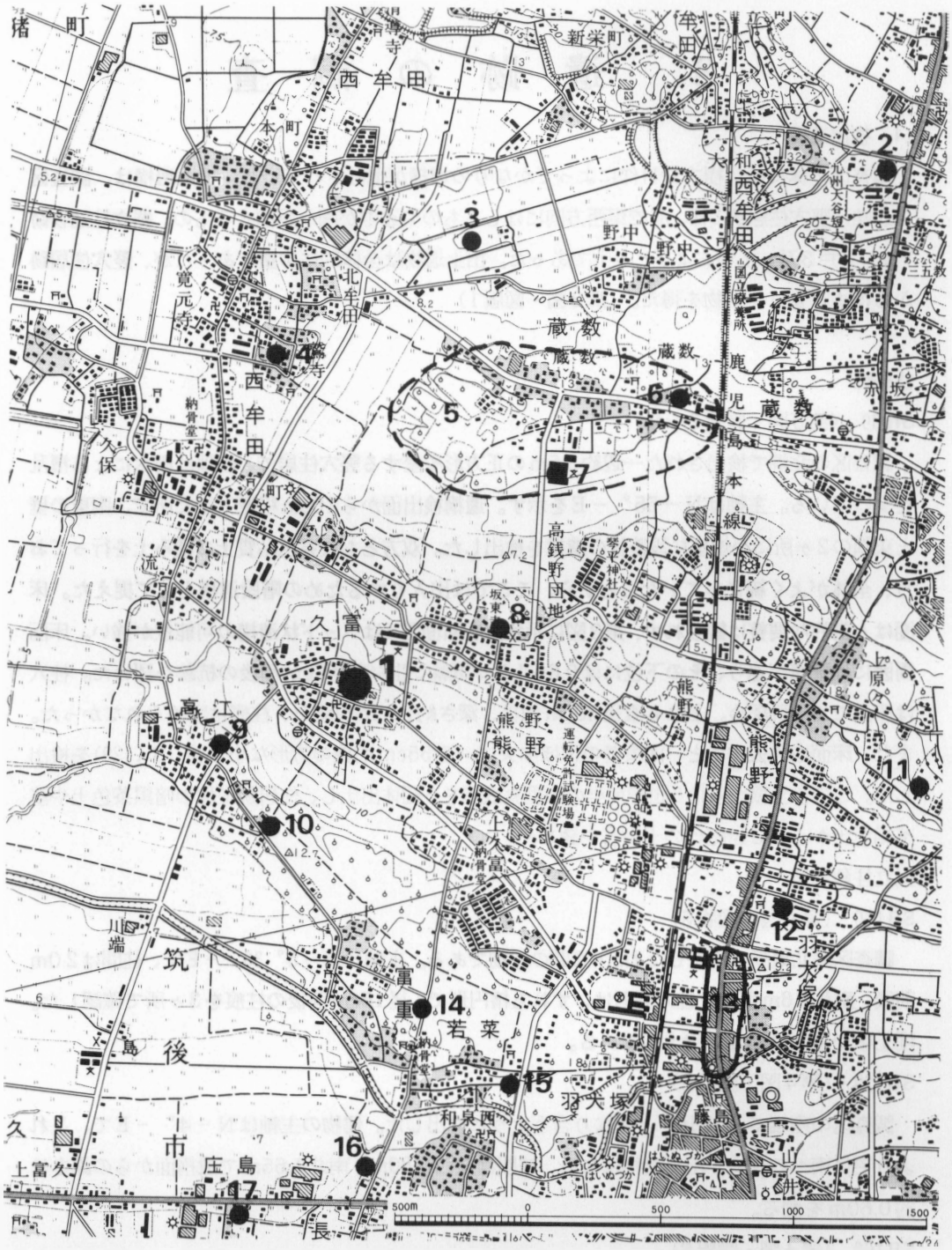
註6：筑後市文化財報告書「高江遺跡」第7集　筑後市教育委員会 1991

註7：「筑後市神社仏閣」第6集　筑後市教育委員会　筑後郷土史研究会　昭和50年

註8：筑後市文化財報告書「裏山遺跡」筑後市教育委員会 1966

註9：筑後市文化財報告書「狐塚遺跡」筑後市教育委員会 1970

註10：筑後市文化財報告書「榎崎遺跡」第9集　筑後市教育委員会 1993



遺跡名

1. 久富鳥居遺跡　2. 瑞王寺古墳　3. 田佛遺跡　4. 鷲寺遺跡　5. 蔵数遺跡群　6. 蔵数東野屋敷遺跡
7. 蔵数森ノ木遺跡　8. 熊野坂東寺　9. 高江窯跡　10. 高江遺跡　11. 前津中ノ玉遺跡　12. 羽犬塚中学校遺跡
13. 羽犬塚町囲　14. 辻遺跡　15. 若菜経塚　16. 坊田遺跡　17. 石塚遺跡

第1図　周辺の遺跡分布図(1/25000)

3．遺跡の調査

(1) 検出遺構

調査区全体には、樹木や耕作によってかなりの遺構が攪乱されていた。検出遺構は、調査区の北端に竪穴住居跡1棟、溝で東西方向にはしるものや途中が南へ屈曲するもの、掘立柱建物跡7棟、井戸3基、土壙およびピットであった。出土遺物は全体的に少量であったが、竪穴住居跡からはまとまった遺物を得た。(第2図・図版1)

住居跡

SI030 (第3図・図版2～4)

調査区の北端で検出された一辺約5.5mの正方形を呈する竪穴住居で、西隅は樹木による攪乱を受けている。主軸はN－55°－Eを示す。遺構検出面から10cm程掘下げた所で、南東の壁と東隅の2ヶ所に小規模な段差状の遺構を検出した。双方とも淡茶色粘質土の積み土を行っており、全体がよく締まっていたことから、ここでは出入りするための階段遺構として捉えた。床面は人為的な調整は観られず、第3図に示す土層断面図4はベッド状遺構の可能性が強い。床面周囲には壁溝が巡り、その下位には0.6～1.5m間隔に並ぶ直径7cm前後の杭跡を認めた。柱穴は床面で4ヶ所認め、どれも直径30cm前後、深さ約50cmを測り、柱痕は認められなかった。また、床面を除去すると、南東壁のほぼ中央に一辺55cm前後の方形な小土壙(SK129)を検出した。この小土壙からは5世紀前半の小型丸底壺を2個体出土し、住居跡堆積の暗黒茶色土や淡茶褐色土からは5世紀代の土師器を認めた。

掘立柱建物跡

SB110 (第4図・図版5)

調査区の北東隅で検出した2間×2間の建物である。主軸はN－5°30′－Eで、柱間は2.0m前後、南北1.6m前後。柱穴掘形はいずれも楕円形で、径15cm前後の柱痕を3ヶ所で確認した。埋土中から土師器片が出土している。

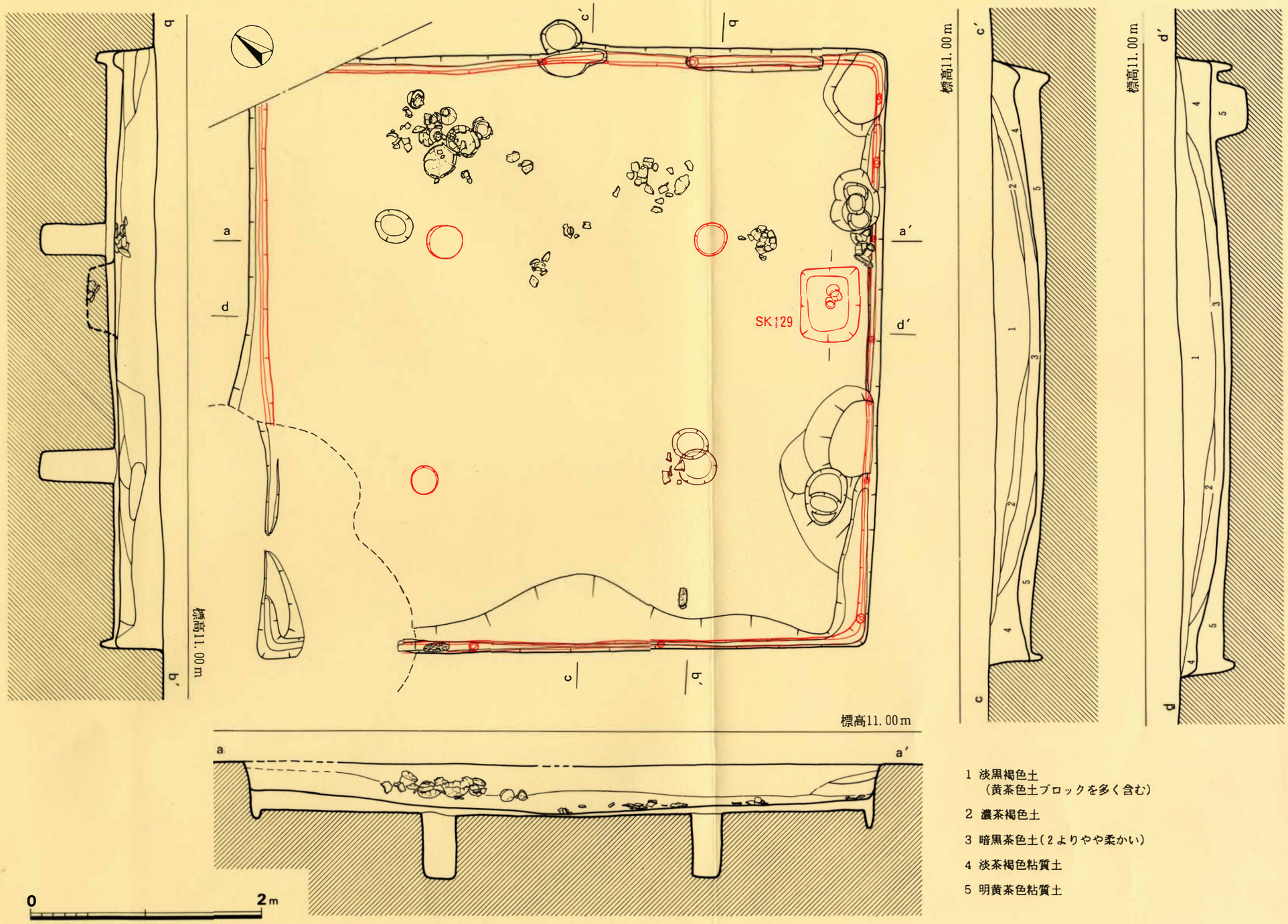
SB120 (第4図・図版6)

調査区の南端で、SB160と重なり合うように検出した。建物の主軸はN－4°－Eで、これより更に南へのびる。出土遺物はない。柱間は東西3.80m、南北1.65mで遺構面からの深さは約0.60mを測る。

SB160 (第4図・図版6)

調査区の南端で検出し、建物はこれより更に南へ延びていくものと思われる。柱間は東西2.0m前後、南北3.0m前後を測り、建物の主軸はN－13°－E、柱穴掘形はいずれも円形を呈す。P6で径13cmの柱痕を確認し、遺物は土師器小皿を出土した。

第2図　久富鳥居遺跡遺構全体図(1/200)



1 淡黒褐色土
（黄茶色土ブロックを多く含む）

2 濃茶褐色土

3 暗黒茶色土（2よりやや柔かい）

4 淡茶褐色粘質土

5 明黄茶色粘質土

第3図　SI030 実測図(1/40)

SB130　(第5図・図版5)

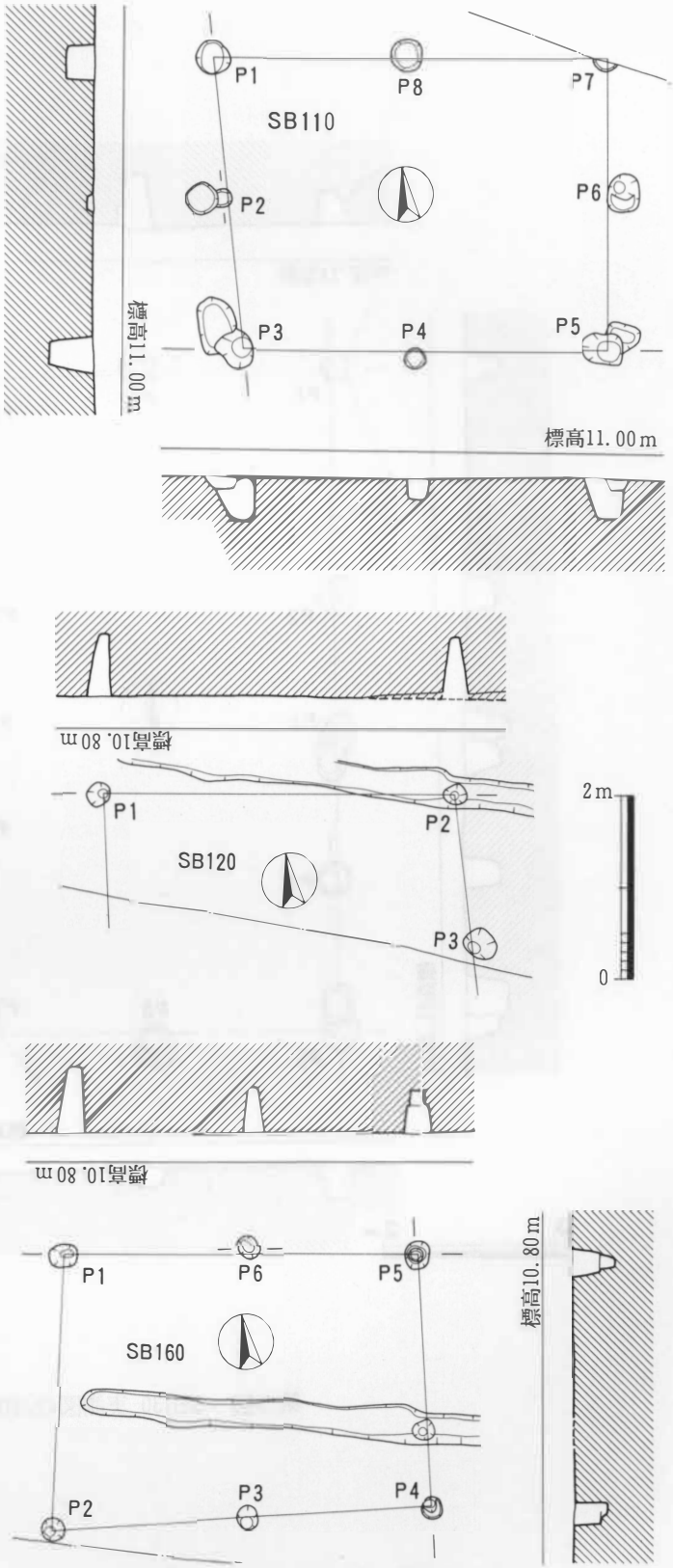
調査区の北側で検出した4間×2間の東西棟の建物。建物の主軸はN－1°－Eで柱間は東西2.0m前後、南北1.3～2.5m。柱穴間(P2～5)、(P7～10)ではピットを多数認め建直しも考慮できる。柱穴掘形は殆どが楕円形で、径15～20cm前後の柱の痕跡を7ヶ所(P1.3.5.6.8.10.12)で確認し、埋土中からは土師器、瓦器を出土している。

SB140　(第6図・図版5)

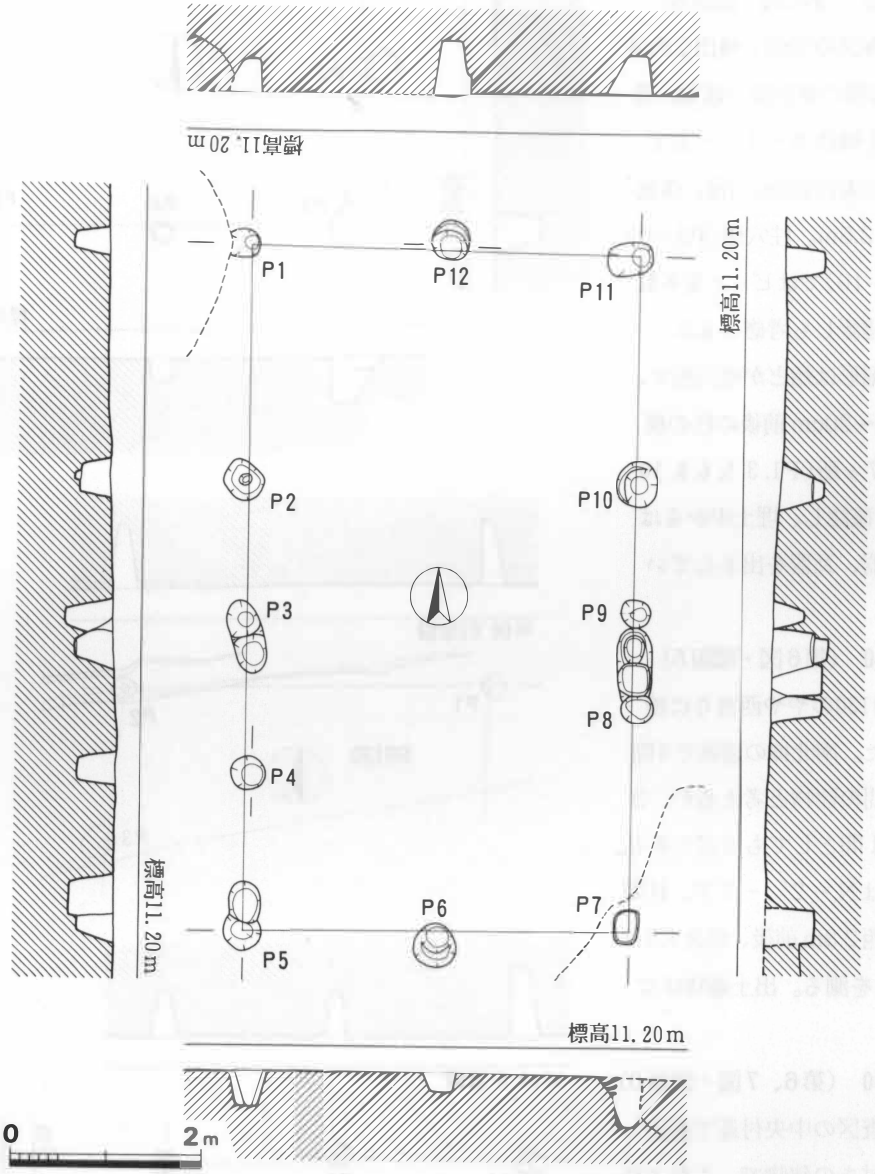
SB130のやや西寄りに検出した。南北棟の建物で4間×1間の建物と考えるが、2間×1間としても比定できる。主軸はN－2°－Eで、柱間は東西2.3m前後、南北1.9～2.4mを測る。出土遺物はない。

SB150　(第6、7図・図版6)

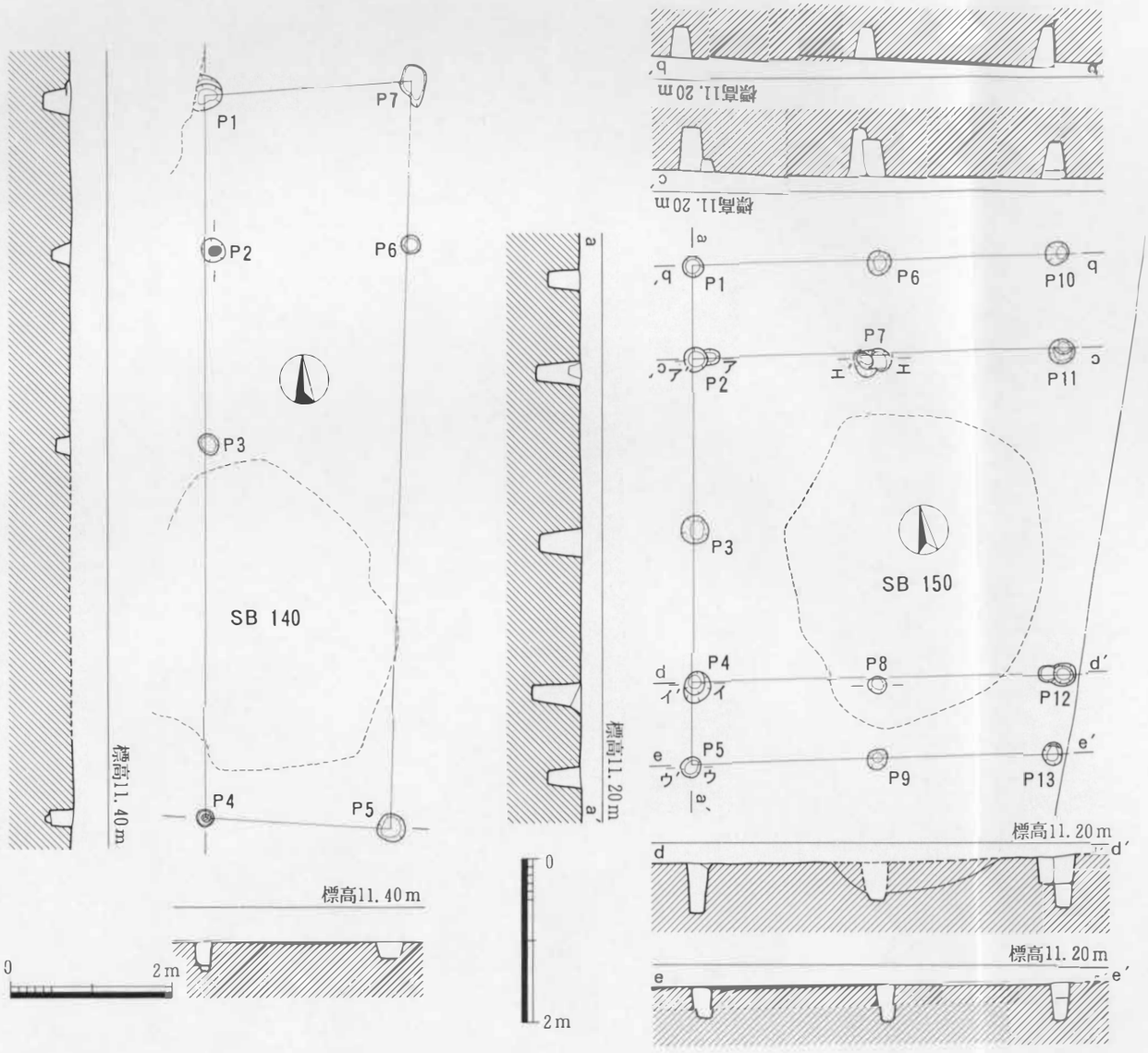
調査区の中央付近で検出した庇付きの建物で、これより更に東へ続く。東西棟の建物と思われ主軸はN－10°30′－Eである。柱穴掘形は殆どが楕円形を呈し、径15～20cm前後の柱の痕跡を6ヶ所で確認し、埋土中からは土師器を出土した。



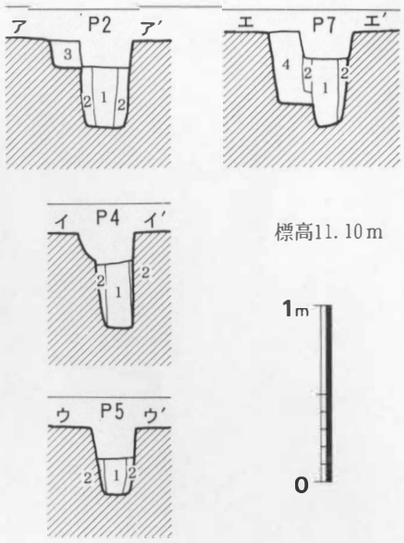
第4図　SB110・120・160 実測図(1/80)



第5図　SB130 実測図(1/80)



第6図　SB140・150 実測図(1/80)



1 明黒茶色砂質土

2 淡黒褐色粘質土(黄茶色粒子をやや含む)

3 淡茶褐色土

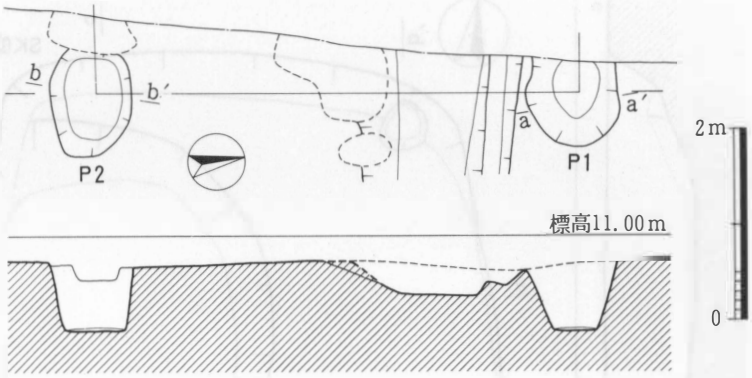
4 黒茶色土

第7図　SB150 土層断面図(1/40)

SB170

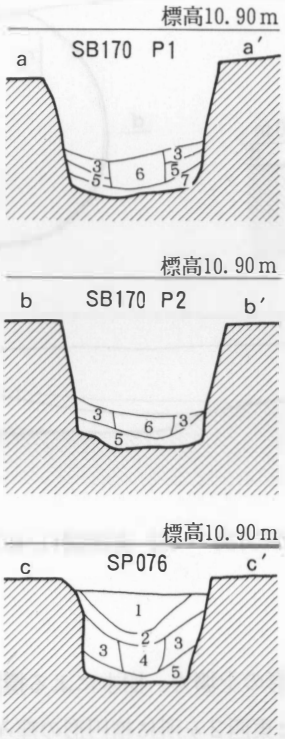
(第8、9図)

調査区南側の西寄りに検出した。ともに柱穴掘形は楕円形でほかの建物柱穴と比べて一回り大きく、直径約90cmを測る。また、約30cmの柱の痕跡を検出した。これより南に掘形・埋土共に類似したピット(SP076)を検出し、SB170との結びつきも気になる。出土遺物はない。



第8図　SB170 実測図(1/80)

(SP076の平面図は第2図参照のこと)



1 淡黒褐色土
(黄茶色土ブロックを多く含む)

2 濃茶褐色土

3 暗黒茶色土(2よりやや柔かい)

4 淡茶褐色粘質土

5 明黄茶色粘質土

6 淡黄茶色粘質土

7 黄茶色粘質土(やや粘性が強い)

0　1m

第9図　SB170 ・SP076 土層断面図(1/40)

土壙

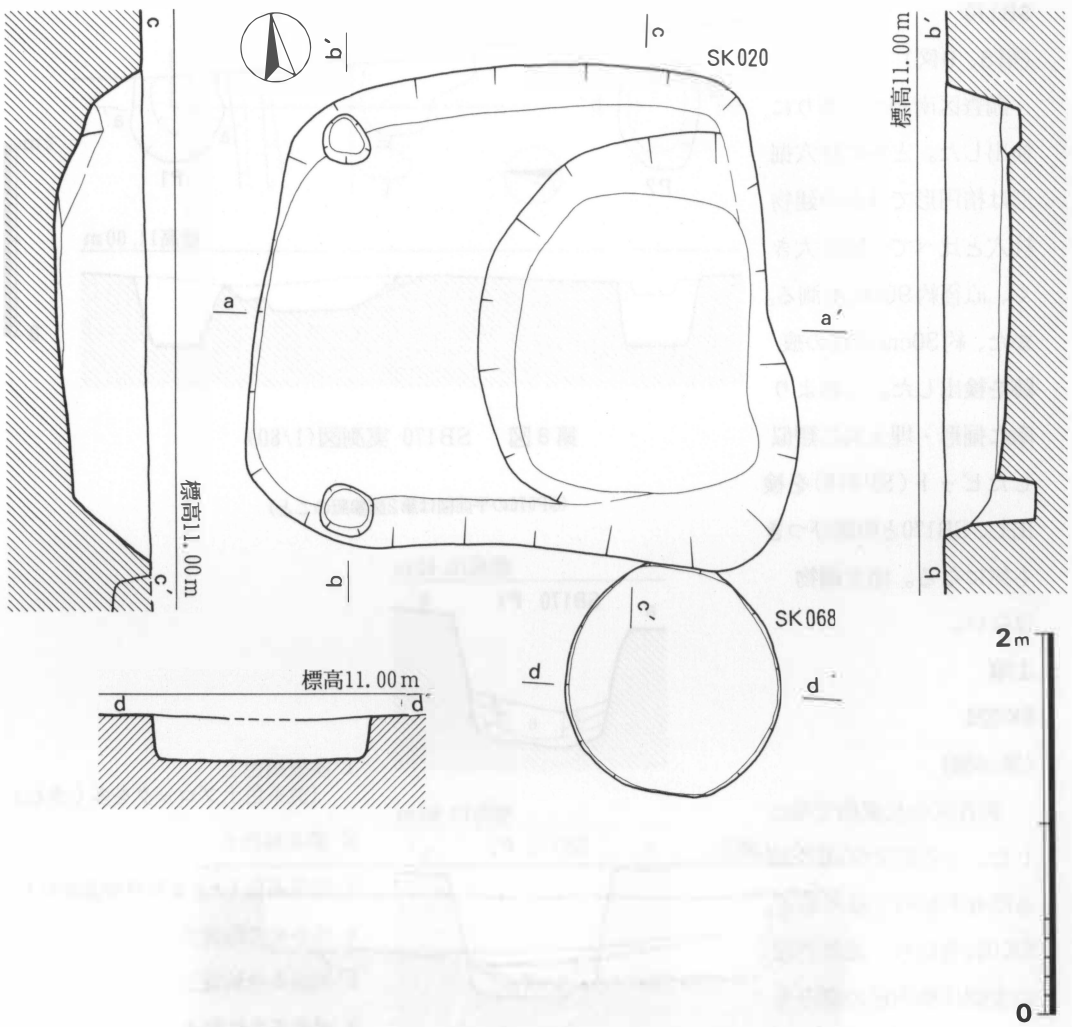
SK020

(第10図)

調査区の北東側で検出した、一辺約2.60mを測る隅丸方形の土壙である。SK068を切り、遺構底面の東側は楕円形の窪みを有する。堆積土は黒茶色砂質土(腐食土)で、遺構検出面からの深さは45cmを測る。西隅には直径25cm程度の2つの柱穴を認めた。遺物は少量で土師器、陶磁器、瓦器を出土した。貯蔵穴と思われる。

SK068　(第10図・図版9)

調査区北東側のSK020に切られて検出した直径1.12cmを測る円形状の土壙である。黒褐色土の堆積土で、土師器、瓦器を認めた。



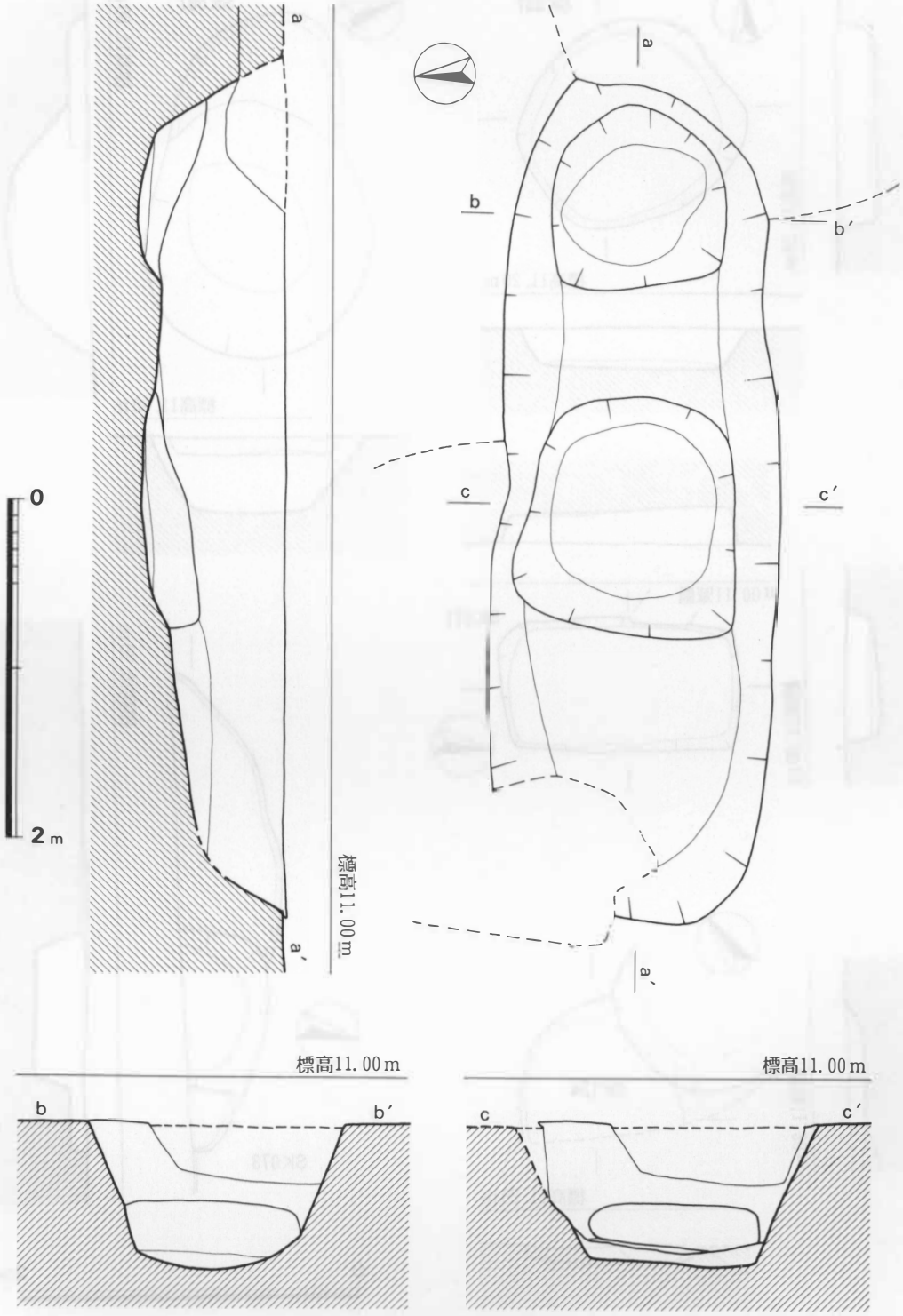
第10図　SK020 ・068 実測図(1/40)

SK028　(第11図・図版9)

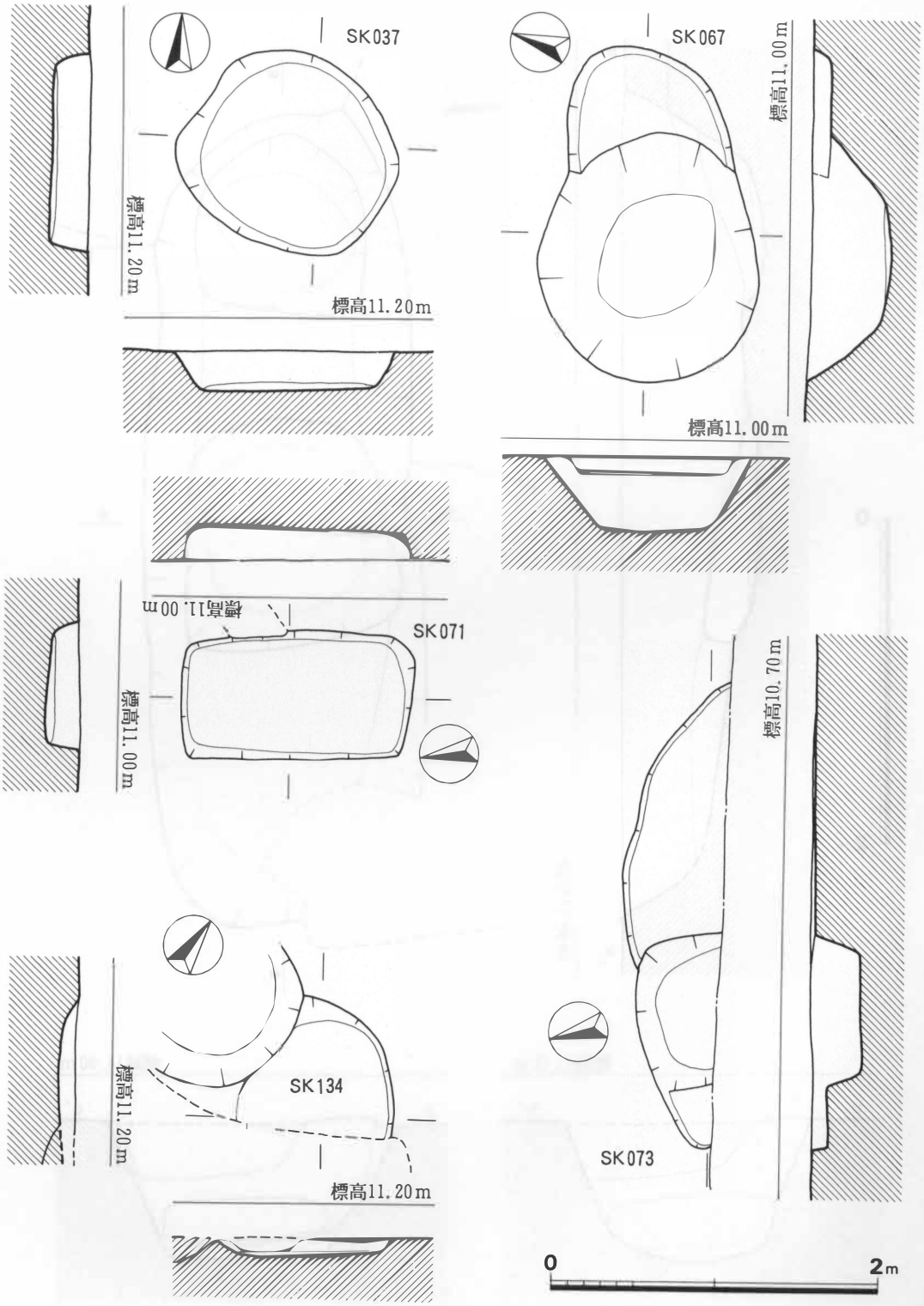
調査区の北東側で検出した楕円形の土壙で、樹木による攪乱を受けている。長径は約5.0m、短径1.6mを測り、遺構の底面には東西2ヶ所に楕円形の窪みを呈す。窪みは東側11.0cm、西側14.0cm、深さは共に85cmを測る。土壙は主として黒茶色砂質土（腐食土）が堆積しており、埋土中からは土師器、陶磁器、瓦器を出土している。貯蔵施設を考える。

SK067　(第12図)

調査区の北東側で検出した楕円形の土壙で、東側に段を有する。長径2.50m、短径1.25mを測り、堆積土は黒褐色土であった。遺物は少量の土師器、瓦器を出土した。



第11図　SK028 実測図(1/40)



第12図　土壙実測図①(1/40)

SK071 （第12図・図版7）

調査区中央付近で検出した長方形の土壙で、溝状に攪乱を受けていた。1.40×0.75×0.20mを測る。黒褐色土の単一な埋土で、最下層からは、ほぼ完形の瓦器小皿が身を上にした状態で出土した。遺物はこの他、瓦器細片も出土している。土壙墓の可能性が高い。

その他の土壙

SK021～023.025.037.069.072.073.134 （第12、13図・図版8、9）

土壙はこれら以外に幾つか検出し、調査区の中央付近に点在する。ほとんどが円形を呈するもので、底面はフラットを呈する。幅70～110cm、遺構検出面からの深さ7～37cmを測る。出土遺物はいずれも少量の土師器、瓦器を認めている。

井戸

SE040 （第14図・図版8）

調査区南東側で検出した楕円形の井戸で、径は約2.0mを測る。堆積土の大半は砂質の黒茶色土で、遺構検出面から1.2m掘り下げた。井戸は更に深いものであったが、涌水が酷かったため掘削を断念した。埋土中からは少量の土師器と瓦器を認めた。

SE084 （第14図・図版8）

調査区西中央付近で掘形の1／2を検出した。攪乱下からの出土で径は1.50mを測り、主に黒茶色砂質土の堆積であった。埋土中の出土遺物はなかった。1.2m掘り下げ、井戸枠は認めなかった。

SE091 （第2図）

調査区南側で検出した。井戸は上部の大半を樹木に攪乱され、更に掘削途中で涌水にあったことから十分な調査が出来なかった。掘形の直径は1.6mを測り、堆積土は粘質の黒茶色土であった。

溝（第2図・図版1）

SD019

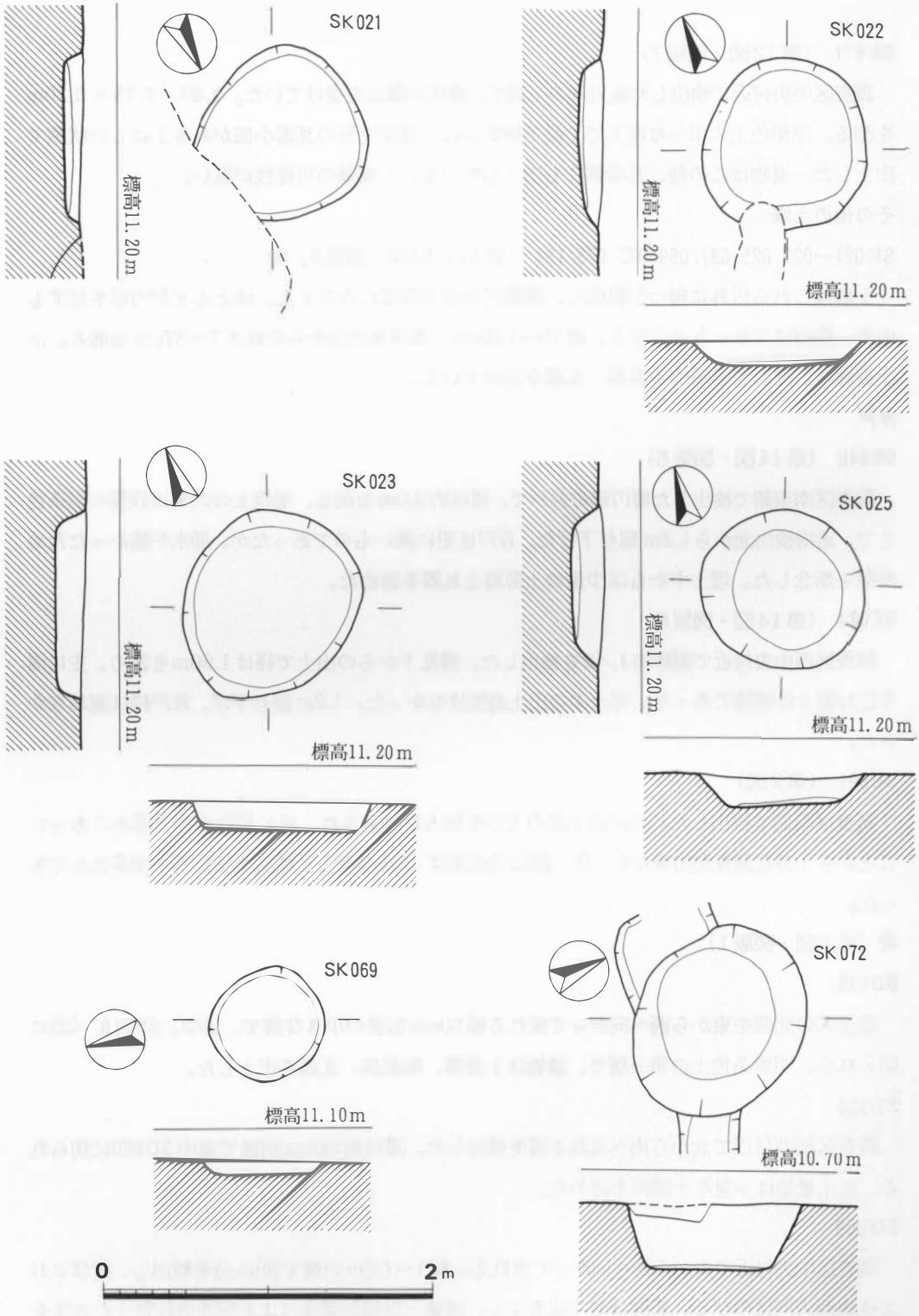
調査区の北側を東から西へ向かって流れる幅50cm前後の小さな溝で、途中、SP018. 032に切られる。明黒茶色土の単一層で、遺物は土師器、陶磁器、瓦器を出土した。

SD050

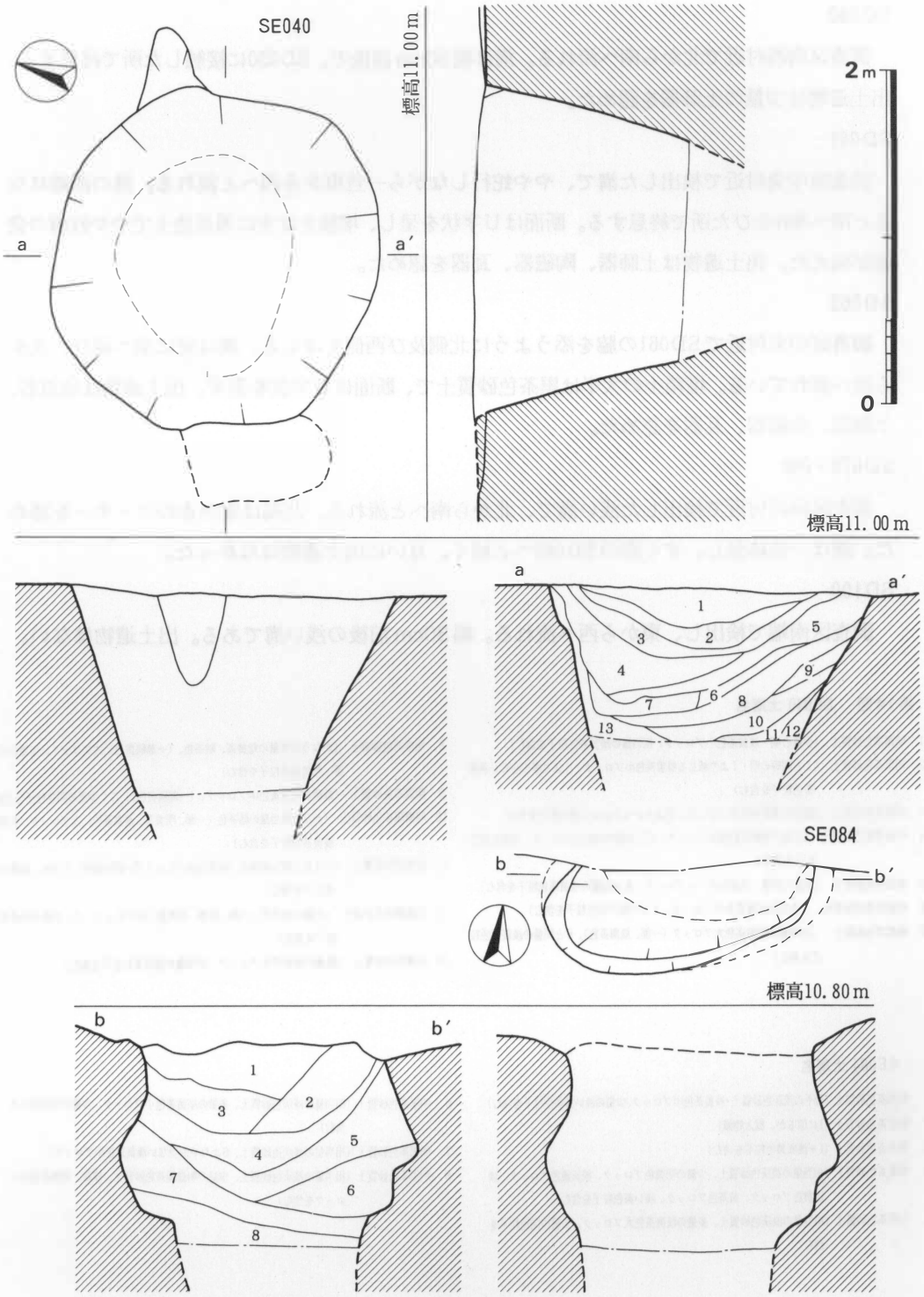
調査区南西付近で北から南へ流れる溝を検出した。溝は幅60cm前後で途中SD060に切られる。出土遺物は少量の土師器を認めた。

SD059

調査区中央付近で東から西へ向かって流れる。幅1～1.5mの溝で39m分を検出し、溝はこれより東西方向にのびる。断面はU字状を呈し、堆積土は植物腐食による黒茶色砂質土が大半を占める。埋土中からは土師器、陶磁器、瓦器を出土した。



第13図　土壙実測図②(1/40)



第14図　井戸実測図(1/40)

SD060

調査区南西付近で北から南へ流れる。溝は幅50cm前後で、SD050に接触した所で終息する。出土遺物は少量の土師器を認めた。

SD061

調査区中央付近で検出した溝で、やや蛇行しながら一旦東から西へと流れる。溝の西端になると南へ8mのびた所で終息する。断面はU字状を呈し、堆積土は主に黒茶色土でやや砂層の発達が伺えた。出土遺物は土師器、陶磁器、瓦器を認めた。

SD065

調査区中央付近でSD061の脇を添うように北側及び西側をはしる。溝は更に南へ延び、北から南へ流れている。堆積土の大半は黒茶色砂質土で、断面はU字状を呈す。出土遺物は須恵器、土師器、陶磁器、瓦器を認めた。

SD070・080

調査区南西付近で検出した浅い溝で、北から南へと流れる。北端は東向きのコーナーを認めた。溝は一旦終息し、すぐ南のSD080へと続く。互いに出土遺物はなかった。

SD100

調査区南端で検出し、東から西へ流れる。幅30cm前後の浅い溝である。出土遺物はない。

第14図　SE040 土層名

1　明黒茶色砂質土　(少量の明・淡黄茶色小ブロック、相当量の淡黄茶色粒子を含む)
2　明黒茶色砂質土　(Ⅰと同等の明・Ⅰより減じる淡黄茶色小ブロック、Ⅰより多少少ない淡黄茶色粒子を含む)
3　明黒茶色砂質土　(数個の淡黄茶色大ブロック、Ⅱよりかなり少ない同色粒子を含む)
4　明濃黒茶色砂質土　(左肩に淡黄茶色特大ブロック、ごく少量の同色小ブロック、少量の同色粒子を含む)
5　明黒茶色砂質土　(多量の灰黄・淡黄色中・小ブロック、Ⅲと同量の淡黄茶色粒子を含む)
6　明濃黒茶色砂質土　(多量の淡黄茶色中ブロック、Ⅱと同量の同色粒子を含む)
7　明黒茶色砂質土　(相当量の暗黄茶色大ブロック(一部、淡黄茶色)、6と同量の淡黄茶色粒子を含む)
8　明黒茶色砂質土　(かなり相当量の暗黄茶、暗茶色、(一部硫黄色)大ブロック、少量の淡黄茶、明黄茶色粒子を含む)
9　明黒茶色砂質土　(数個の淡黄茶色中ブロック、(一部灰黄色)、ごく少量の同色粒子を含む)
10　明濃黒茶色砂質土　(かなり相当量の暗茶色(一部、明黄茶、淡黄茶色)大ブロック、多量の淡黄茶色粒子を含む)
11　明黒茶色砂質土　(かなり大部分を暗茶、暗黄茶色ブロック(一部灰黄色)で占め、多量の同色粒子を含む)
12　明濃黒茶色砂質土　(少量の暗茶色(一部、明黄、灰黄色)小ブロック、ごく少量の淡黄茶色粒子を含む)
13　淡黒茶色砂質土　(数個の暗黄茶色ブロック、相当量の淡黄茶色粒子を含む)

SE084 土層名

1　明黒茶色砂質土(若干の淡灰色砂質土・淡黄茶色中ブロック、少量の淡い黄茶色粒子を含む)
2　明黒茶色砂質土(1に似るが、混入物減)
3　明黒茶色砂質土(1＋淡灰黄色粒子を含む)
4　明黒茶色砂質土(相当量の淡灰色砂質土、少量の明黄色ブロック、淡灰黄色ブロック、淡灰黄色ブロック、黄茶色ブロック、淡い茶色粒子を含む)
5　明黒茶色砂質土(相当量の淡灰色砂質土、多量の淡黄茶色大ブロック、少量の同色粒子を含む)
6　明黒茶色砂質土(相当量の淡灰色砂質土、多量の淡黄茶色小ブロック、少量の同色粒子を含む)
7　明黒茶色砂質土(相当量の淡灰色砂質土、6よりやや少ない淡黄茶色小ブロック)
8　明黒茶色砂質土(相当量の淡灰色砂質土、少量の明濃黒茶色砂質土、淡黄、明黄茶色小ブロックを含む)

(2) 出土遺物

出土遺物の詳細を報告するにあたり、今回出土した土師器坏形土器についての分類は「太宰府・佐野地区遺跡群III 太宰府市の文化財第20集　太宰府教育委員会1993」、青磁、白磁についての分類は「大宰府条坊跡II 太宰府市の文化財第7集　財団法人　古都大宰府を守る会　1983」によるものである。

住居跡出土土器

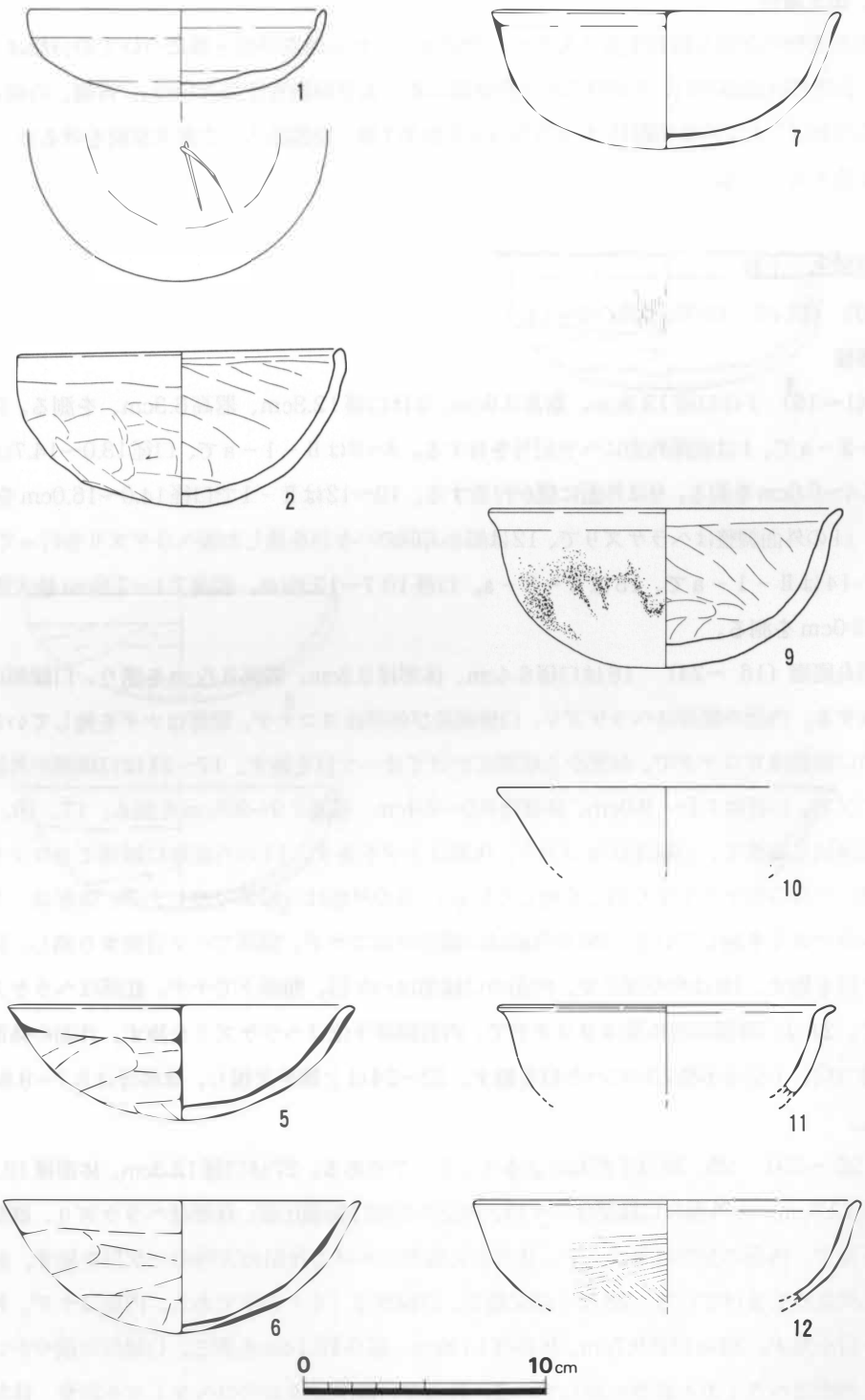
SI030　(第15～19図、図版10～14)

土師器

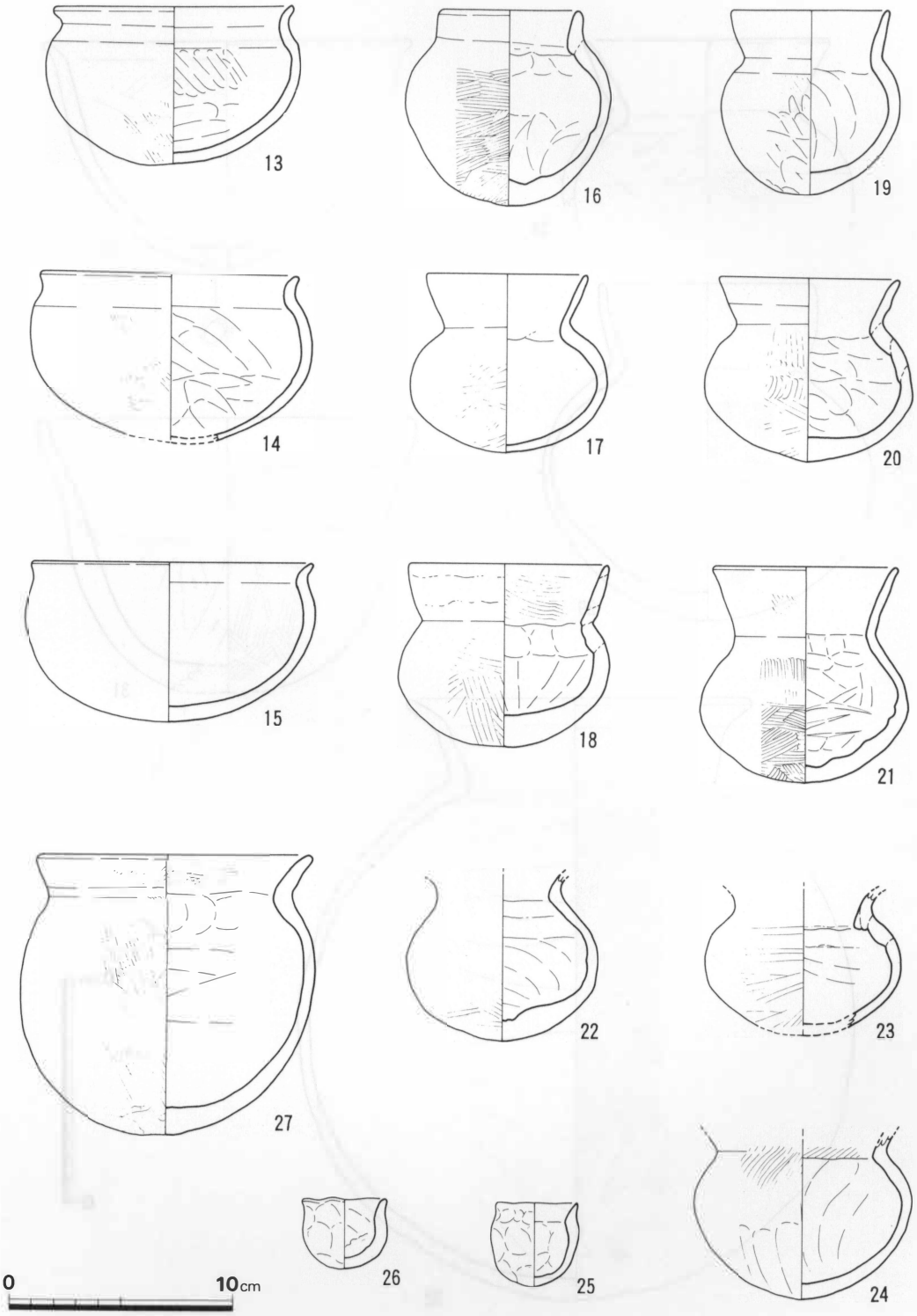
坏 (1～15)　1は口径12.3cm、器高3.6cm、2は口径12.3cm、器高6.3cm、を測る。何れもⅠ－2－aで、1は底部外面にヘラ記号を有する。3～9はⅡ－1－aで、口径13.0～14.7cm、器高4.4～6.6cmを測る。9は外面に煤が付着する。10～12はⅡ－1で口径14.0～16.0cmを測る。10、11の外面調整はヘラケズリで、12は斜め方向のハケ目を施した後ヘラケズリを行っている。13、14はⅡ－1－aで、15はⅡ－3－a。口径10.7～12.6cm、器高7.1～7.6cm最大径11.3～13.0cmを測る。

小型丸底壺 (16 ～24)　16は口径6.4cm、体部径9.2cm、器高8.8cmを測り、口縁部はやや外反する。内面の底部はヘラケズリ、口縁部及び体部はヨコナデ、頸部はナデを施している。外面の口縁部はヨコナデで、体部から底部にかけてはハケ目を施す。17～21は口縁部が外反するタイプで、口径は7.1～ 9.0cm、体部径8.0～9.4cm、器高7.9～9.6cmを測る。17、19、20の内面は同じ調整で、口縁部はヨコナデ、体部はナデを施す。17の外面は口縁部でヨコナデ、体部はハケ目の後ナデですり消しを施している。19の外面は口縁部でヨコナデ、体部はハケ目の後ヘラケズリを施している。20の外面は口縁部でヨコナデ、頸部でハケ目後すり消し、体部はハケ目を施す。18はやや厚手で、内面の口縁部はハケ目、頸部下でナデ、底部はヘラケズリを施す。21は口縁部の内外面はヨコナデで、内面頸部下位はヘラケズリを施す。外面の体部上位は縦方向、下位は不整方向のハケ目を施す。22～24は上部を欠損し、体部径は8.7～9.8cmを測る。

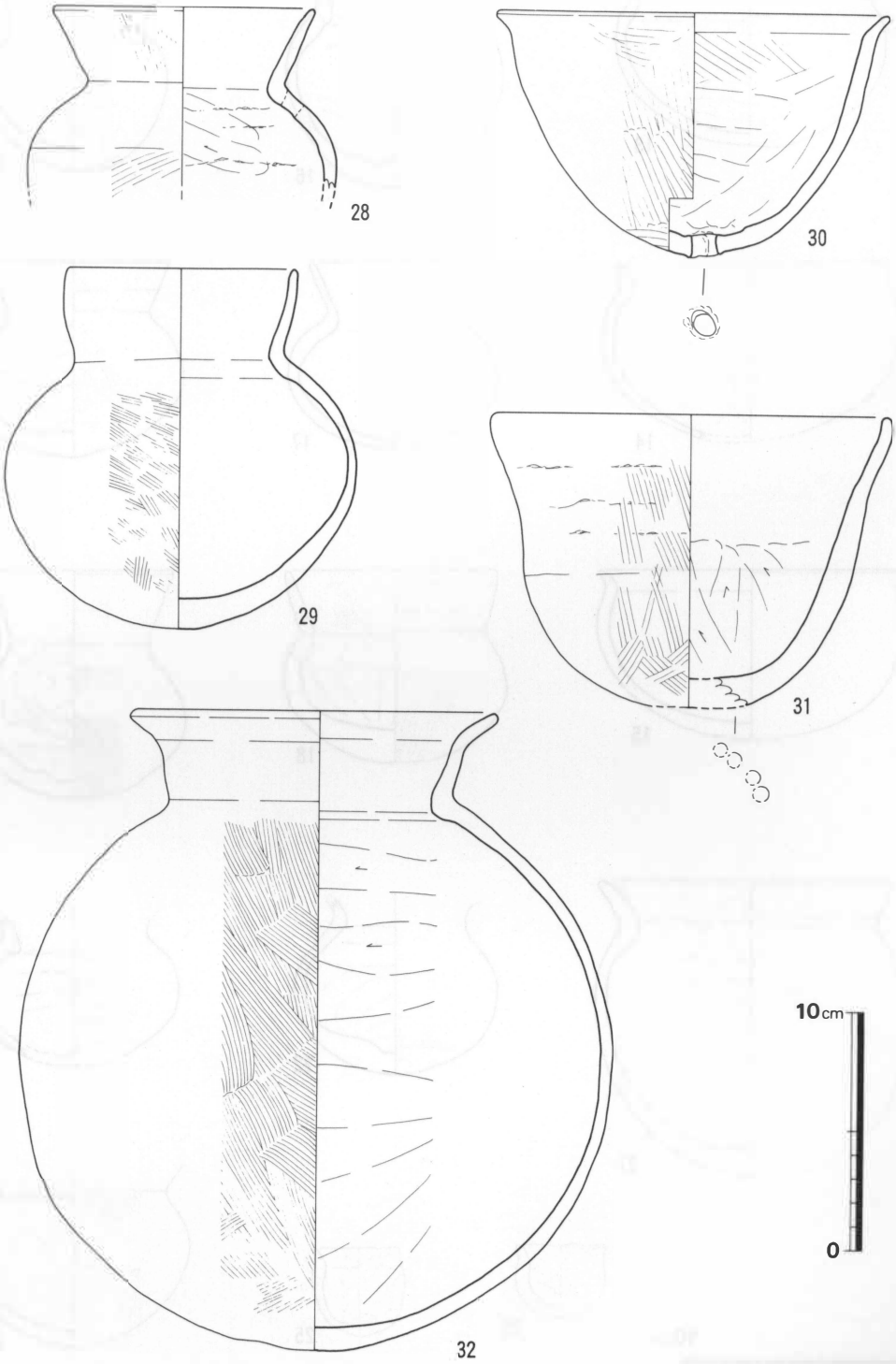
壺 (25 ～29)　25、26は手捏ねによるミニチュアである。27は口径12.3cm、体部径13.2cm、器高12.5cm。内外面の口縁部はハケ目、内面の頸部は指頭圧痕、体部はヘラケズリ、底部はナデを施す。外面の頸部はヨコナデ、体部から底部にかけては斜め方向のハケ目を施す。底部には二次焼成を受けている。28は下部欠損で、口縁部は「く」の字である。内面はナデ、外面はハケ目を施す。29は口径9.7cm、体部径14.8cm、器高15.1cmを測る。口縁部は緩やかに内湾し、内面はヘラミガキ調整を施している。外面の口縁部は横方向のヘラミガキ調整、体部から底部にかけてはハケ目の後ヘラミガキ調整を施す。



第15図　SI030 出土土器実測図①(1/3)



第16図　SI030 出土土器実測図②(1/3)

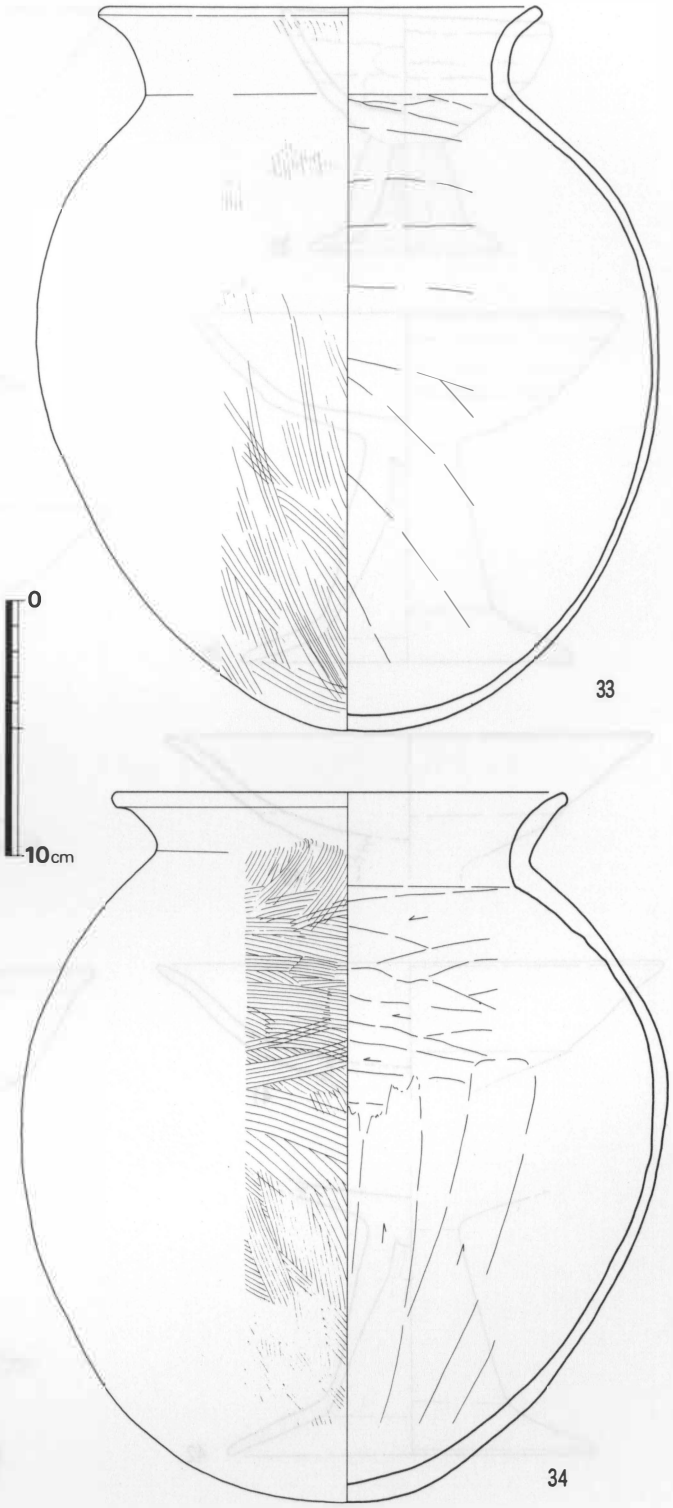


第17図　SI030 出土土器実測図③(1/3)

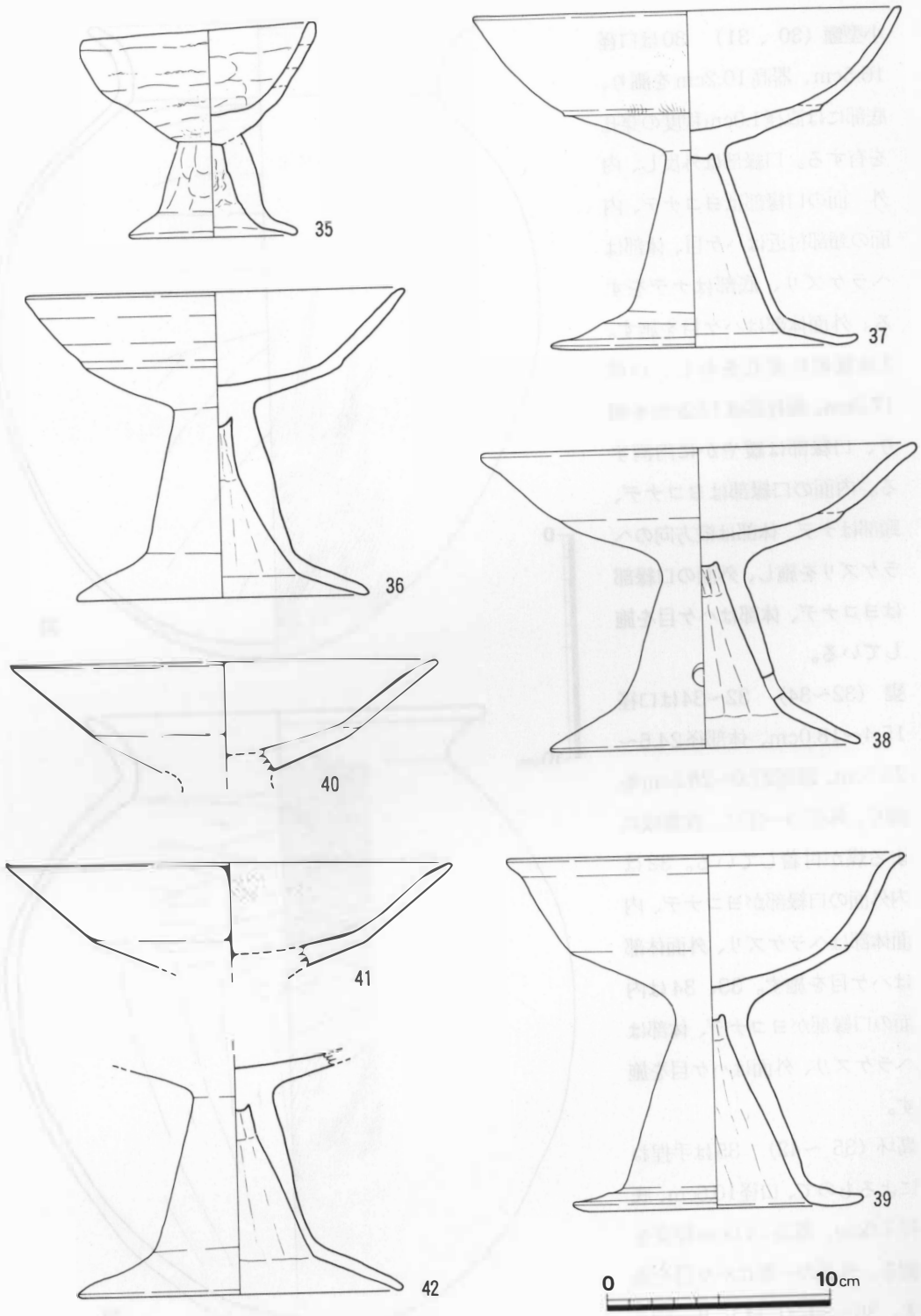
小型甑（30 、31）　30は口径16.5cm、器高10.2cmを測り、底部には直径1.0cm程度の穿孔を有する。口縁部は外反し、内外　面の口縁部はヨコナデ、内面の頸部付近はハケ目、体部はヘラケズリ、底部はナデをする。外面体部はハケ目を施す。3は底部に多孔を有し、口径17.0cm、現存高は12.2cmを測り、口縁部は緩やかに内湾する。内面の口縁部はヨコナデ、頸部はナデ、体部は縦方向のヘラケズリを施し、外面の口縁部はヨコナデ、体部はハケ目を施している。

甕（32～34）　32～34は口径15.4～18.0cm、体部径24.6～25.5cm、器高27.0～28.5cmを測り、外面の一部に二次焼成による煤が付着している。32は内外面の口縁部がヨコナデ、内面体部はヘラケズリ、外面体部はハケ目を施す。33、34は内面の口縁部がヨコナデ、体部はヘラケズリ、外面はハケ目を施す。

高坏（35 ～42）　35は手捏ねによるもので、口径10.6cm、底径7.6cm、器高14.0cm程度を測る。外面の一部にハケ目を施す。36～39は口径17.0～19.6cm、底径13.0～13.9cm、器高



第18図　SI030 出土土器実測図④(1/3)



第19図　SI030 出土土器実測図⑤(1/3)

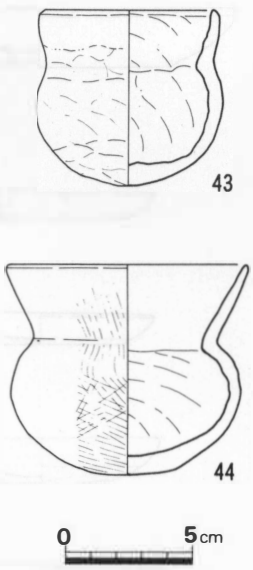
13.5～15.7cmを測る。36は口縁部がやや外反し、坏部の内外面はヨコナデを施す。表面には赤色の化粧土を施す。37は口縁部が緩やかに内湾する。坏部の内面はヘラミガキ、外面口縁部付近はハケ目をヨコナデ　ですり消し、後にヘラミガキ、底部はヨコナデを施している。 38は口縁部がやや外反し、表面に薄く化粧土を施す。脚部には3箇所の穿孔を不等間隔に穿つ。39は口縁部が外反し、底部から体部にかけての変換部で強い稜線を認める。表面には赤色の化粧土が施される。40、41は脚部欠損で38と同じタイプになり、口径は19.2～20.0cm。42は坏部欠損で底径は14.6cmを測る。

SK129（住居床下・第20図、図版15）

土師器

小型丸底壺（43、44）　43、44は共にSI030掘形下の土壙から出土した完形品である。43は口径7.0cm、胴径7.4cm、器高6.9cmを測る。内面は強いナデを施し、外面の体部はナデ、底部はナデの後ヘラケズリを施す。口縁端部はヘラによる面取りが認められる。44は口径9.6cm、胴径9.0cm、器高8.5cmを測る。

内面の口縁部はヨコナデ、体部は強いナデ、底部はナデを施している。



第20図　SK129（住居床下）出土土器実測図(1/3)

掘立柱建物出土土器

SB130-P7（第21図、図版15）

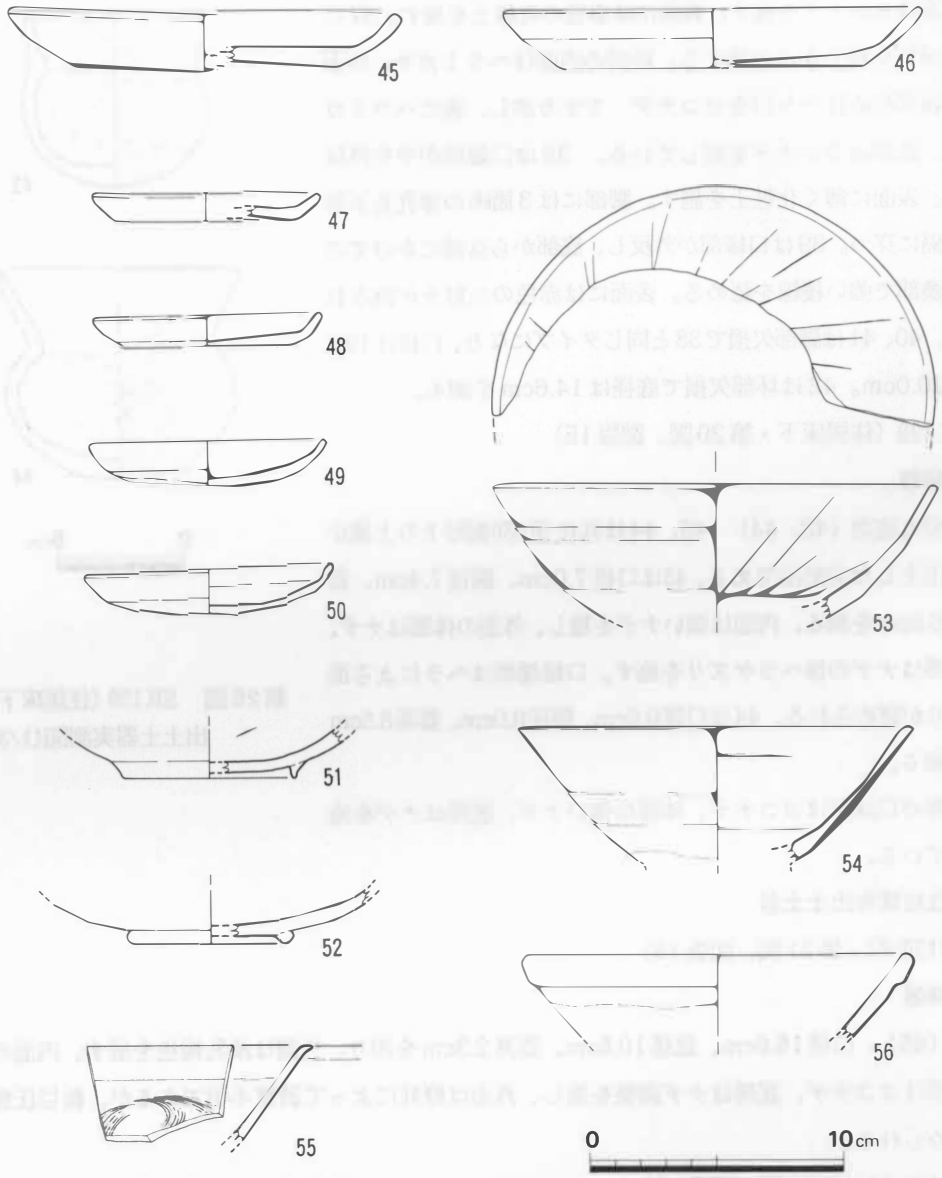
土師器

皿（45）　口径15.6cm、底径10.5cm、器高2.3cmを測り、色調は淡乳褐色を呈す。内面の口縁部はヨコナデ、底部はナデ調整を施し、外面は磨耗によって調整不明であるが、板目圧痕は認められる。

SB160-P3（第21図、図版15）

土師器

皿（46）　口径16.6cm、底径12.0cm、器高2.4cmを測る。内外面の口縁部はヨコナデ、内面底部はナデ調整が施され、外面底部はヘラ切りで筵目を認める。また、内面底部には油煙が付着している。



第21図　掘立柱建物・土壙出土土器実測図(1/3)

土壙出土土器

SK 028（第21図、図版15、16）

土師器

小皿（47）　口径9.0cm、底径7.0cm、器高1.1cmを測り、口縁部はやや内湾する。底部は糸切りで内外面ともヨコナデである。

瓦器

小皿（49）　口径9.9cm、底径8.2cm、器高1.8cmを測り、色調は銀灰色である。口縁部内外面はヨコナデで、底部は内面から押し出した後にナデを施す。外面の底部は糸切りで、板目圧痕を認める。

碗（51 ～53）　何れも表面は磨耗のため調整は不明である。51は高台径6.7cmを測り、52は底部の細片で、高台径は6.6cmを測る。53は口径17.5cmを測り、内面に51同様の線刻文様を認め、51と同一個体の可能性が高い。内面に工具による線刻文様が観察できる。

青磁

碗（54）　口径15.6cmを測り、内面に沈線が施される。D－Ⅷ－1類

白磁

碗（55 、56）　56は口径15.6cmを測り、口縁部は玉縁である。Ⅳ－2類

SK067（第21図、図版15）

土師器

小皿（48）　口径9.1cm、底径6.7cm、器高1.3cmを測る。内外面の口縁部はヨコナデ、内面底部はナデ調整が施される。外面底部は糸切り後の板目圧痕を認める。下層からの出土である。

SK071（第21図、図版16）

瓦器

小皿（50）　完形品で、口径9.9cm、底径8.2cm、器高1.8cmを測る。色調は黒灰色で内面はヘラケズリを施す。外面底部はヘラ切り、板目圧痕を認め、ヘラミガキも観察される。

溝出土土器

SD026（第22図）

土師器

高坏（65）　脚部細片で復原底径は12.0cmを測る。内面外面ともにハケ目ののち、ヨコナデを施している。

SD050（第22図、図版16）

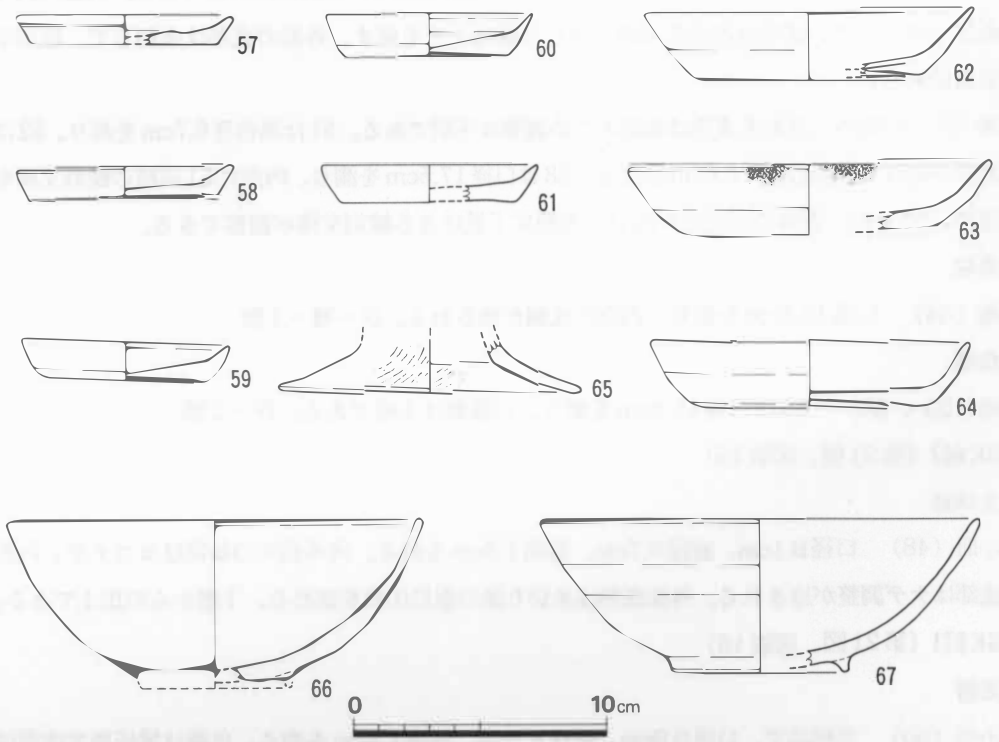
土師器

坏（64）　口径12.6cm、底径9.6cm、器高2.6cmを測り、底面は糸切り・板目圧痕を残す。内面外面ともヨコナデで口縁部はやや外反する。

SD061（第22図、図版16）

土師器

小皿（57、58）　互いに底面は糸切り痕を認め、内面外面ともヨコナデである。また、57は口縁部外面に沈線を認める。57は口径8.6cm、底径7.5cm、器高1.2cm、58は口径8.6cm、底径7.4cm、器高1.3cmを測る。



第22図　溝・ピット出土土器実測図(1/3)

SD065（第22図、図版16）

土師器

小皿（61）　口径8.6cm、底径7.0cm、器高1.5cmを測り、内面外面ともヨコナデで底面に糸切り痕を認める。

坏（62 、63）　互いに底面は糸切り・板目圧痕を認め、内面外面ともヨコナデである。口縁部はやや外反し、63に油煙痕を認める。62は口径13.0cm、底径9.0cm、器高2.7cm、63は口径14.4cm、底径10.0cm、器高2.8cmを測る。

SD090（第22図、図版16）

土師器

小皿(60) 口径8.2cm、底径6.4cm、器高1.7cmを測り、底部内面はナデ、その他の内面外面はヨコナデである。底面は糸切り・板目圧痕を認める。口縁部はやや外反する。

ピット出土土器

SP035（第22図）

瓦器

碗（66）　口径16.4cm、底径6.0cm、器高6.6cmを測る。口縁部の内面外面はヨコナデで、外面は風化が著しく、内面は横方向のヘラミガキを施す。

SP093（第22図、図版16）

土師器

小皿（59）　口径8.2cm、底径6.4cm、器高1.5cmを測り、底面は糸切り・板目圧痕を認める。内面外面はヨコナデである。

SP113（第22図、図版16）

瓦器

碗（67）　口径17.4cm、底径7.0cm、器高6.1cmを測る。口縁部外面及び内面はヨコナデ後横方向のヘラミガキを施し、体部外面はヘラケズリ後横方向のヘラミガキを施す。また、高台は接合のヨコナデを認める。

その他の遺物

鉄製品（第23図、図版17）

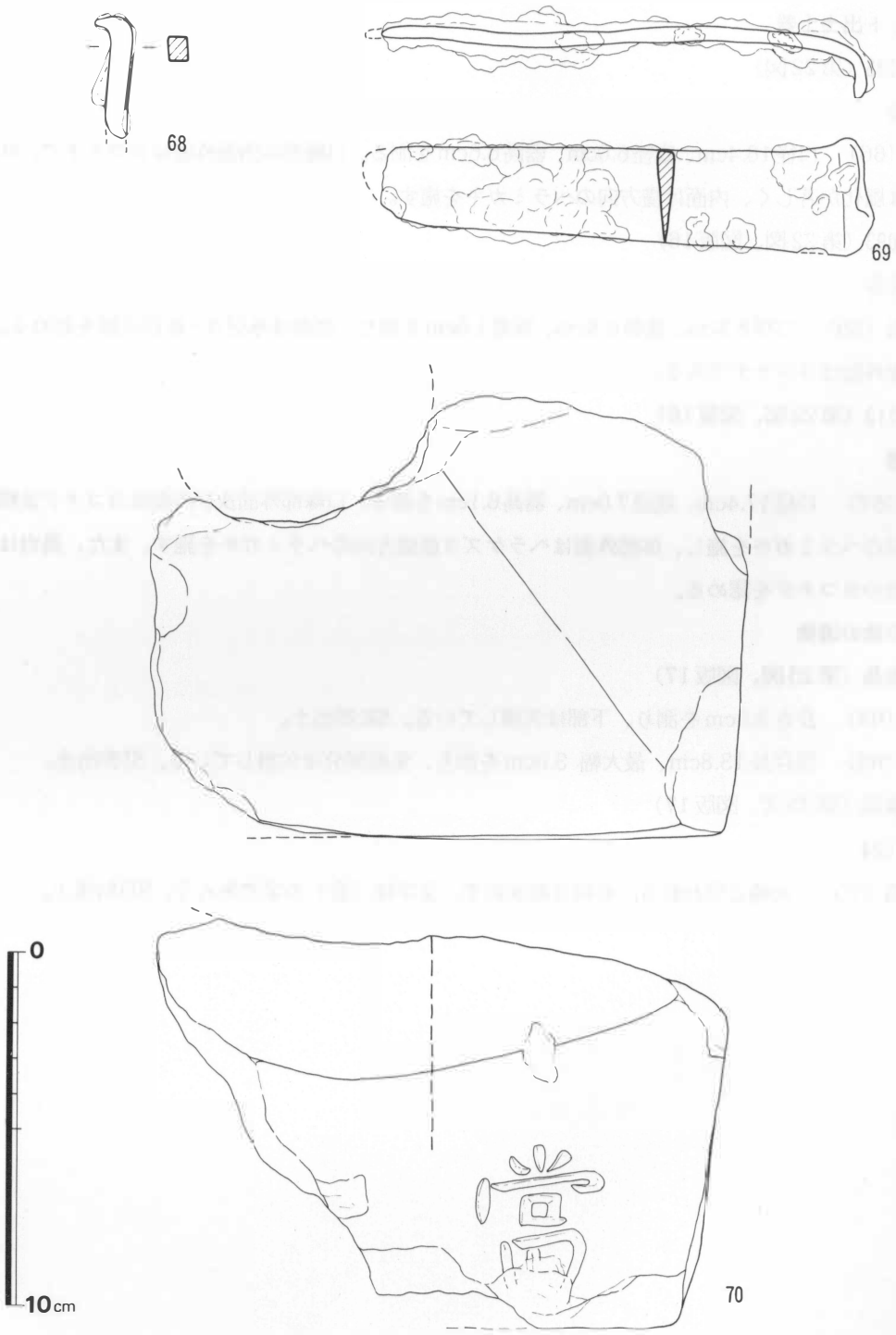
釘（68）　長さ3.5cmを測り、下部は欠損している。SK28出土。

鎌（69）　現存長13.8cm、最大幅 3.0cmを測り、先端部分は欠損している。SI30出土。

石製品（第23図、図版17）

SD024

石塔（70）　火輪と思われる。石材は凝灰岩で、文字は「當」の字であろう。SD24出土。



第23図　鉄製品・石製品実測図(1/2)

4. おわりに

今回発掘調査した久富鳥居遺跡は、L字状の南北に長い調査区で、約2,000㎡を実施した。

当初、試掘調査の段階では、調査区の全面に遺構が密集しているものと思われていたが、調査を実施してみると殆どが梅の樹木や畑の耕作などの攪乱によるものであった。検出された遺構は主として、古墳時代と中世にあたるもので、竪穴住居1棟、掘立柱建物跡7棟、井戸3基、区画溝、土壙、ピットなどである。各遺構、遺物の内容については、(3. 遺跡の調査) で触れたとおりであるが、遺物は全体的に細片かつ少量であったため、十分な検討ができなかった。しかしながら、遺構から見た遺跡の性格を加味しつつ、時代ごとに概観することでまとめとしたい。

(1) 古墳時代について

古墳時代の遺構としては、調査区の北端で検出した竪穴住居 (SI030) があり、外にはこの時代にあたる遺構は検出されなかった。住居プランや遺物出土状況については説明したとおりで、覆土や床付近から多量の土器を廃棄していることや、遺物に高杯・ミニチュアを出土していることなどから祭祀的な様相を示した住居であることが窺える。また、祭祀と関連のある遺構としては、住居掘形の直下 (南東壁の中央部) から検出した、一般的に屋内土壙とされるSK129がある。SK129の堆積土は、住居跡の覆土と類似する淡黒褐色土を呈しており、明らかに床埋土とは異なり、住居廃棄の直前まで使用されていた可能性も高い。出土土器をみると、SK129出土の土器(43, 44)、住居の覆土や床下出土の土器は、柳田編年Ⅲb～Ⅳ式に相当し、5世紀前半から中頃の年代を示す堆積の状況などを考慮すると、実際は、住居廃棄から土器廃棄までの時間差はほとんどないものと考える。

時期・プラン共に酷似する竪穴住居としては、当市に所在する田佛遺跡[註-1](住2・住6・住19・住21号)、また、近隣では八女市袴田遺跡[註-2] (SB12) などで調査例を認める。

このように、この時期における遺構は住居跡に限るもので、集落の規模や性格についての考察はほぼ不可能な状態である。周辺の地形をみると集落の本体は、これより更に北部へ広がるもの(現在の松原小学校付近)と考えられ、今後の周辺の調査が待たれる。

(2) 中世について

中世にあたる遺構としては、掘立柱建物跡7棟、井戸3基、区画溝、土壙などがあり、出土遺物から14世紀代を比定する。第2図にみるように建物は調査区全体に配置され、しかも逆L字状に屈曲し、建物群を区画するかのようにのびる溝との関連も気になるところである。ここでは建物の配置や溝との関係を考慮しながら、若干の検討を試みることにする。

建物は主軸がほぼ同じ方位を示す、東西棟と南北棟に概ね分別することができ、東西棟で

はSB110・SB150・SB160、南北棟ではSB120・SB130・SB140が挙げられる。検出状況から、主軸の方位などを考慮しながら一連の建物群をグループで整理すると、(SB110・120)、(SB150・160)、(SB130)、(SB140) となるが、建物の柱穴には切り合いがないことや殆どの遺構からは主要となる出土遺物がなかったため、時期の格差を判断するまでは至ることができなかった。ところで、今回検出したなかで一際大きな建物となるSB150は、建物の全体を検出していないものの、南北の両面に庇を有する二面庇の建物で、柱穴も深く掘られたしっかりしたものであることから、集落の中心的建物として捉えることができる。

建物群とほぼ同じ方位を示すものでは、先述したとおり、東西から南北方向に屈曲する比較的幅の狭い溝がある。各溝の内容については (3. 遺跡の調査) で触れたとおりで、遺物は細片かつ少量であったものの、建物群出土遺物とほぼ同時期の土師器を出土しているため同時期所存のものと判断される。遺構の切り合いから溝の前後関係を整理すると、古い順に(SD050)－(SD070・080)－(SD065)－(SD061) －(SD059)となり、溝は幾度となく位置を東へずらしながら掘り直しをしていったものと考えることができる。(各々の溝は土層断面から浚った痕跡を認めない。) また、これらの溝とほぼ平行にはしる同時期の溝が、調査区の北端で検出され (SD019)、先述した屈曲する溝と関連があるものとすれば、溝間には必然と一つの空間が浮かびあがってくるのである。この空間からは建物や貯蔵穴、井戸といった生活の一部を代表する遺構が数多く検出されており、これら一連の溝はある空間を区画[註－3]するためのものと概ね想像することができる。(SD019とSD061の距離は溝の心々で23.5mを測る。)

主たる時期は遺構や出土遺物の状況などから13世紀中頃から14世紀前半を比定するが、本遺跡周辺には12世紀中期勧請にかかる熊野神社[註－4]を控えていることなどから、神社との関連性など今後の課題とされる部分は残されたことになる。周辺はまだ破壊の及んでいない微高地が続いているため、今後の調査が大いに期待されるところである。

(参考文献)

註－1　筑後市教育委員会「田佛遺跡」 筑後市文化財調査報告書　第5集 1988

註－2　八女市教育委員会埋蔵文化財調査概要2」 第19集 1990

註－3　久留米市教育委員会「城崎遺跡」 第82集 1993

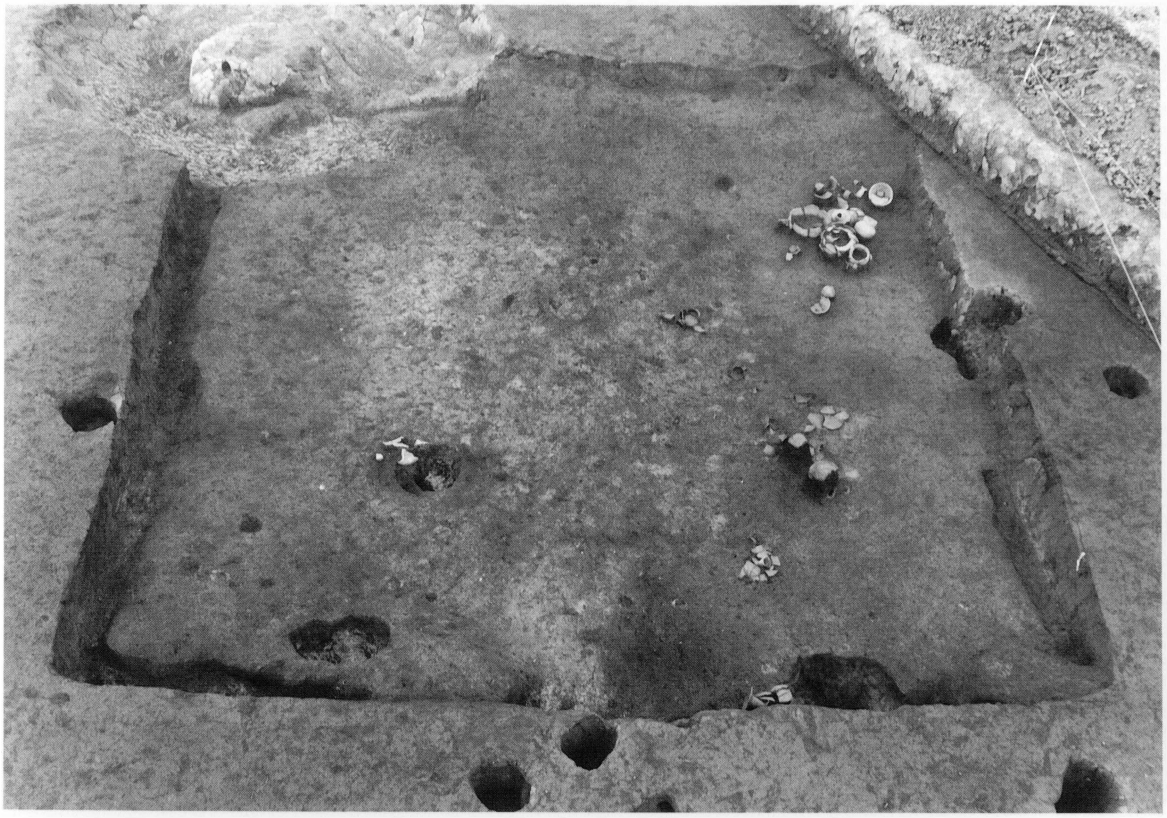
註－4　筑後市教育委員会　筑後郷土史研究会「筑後市神社仏閣」 第6集　昭和50年

図　　版

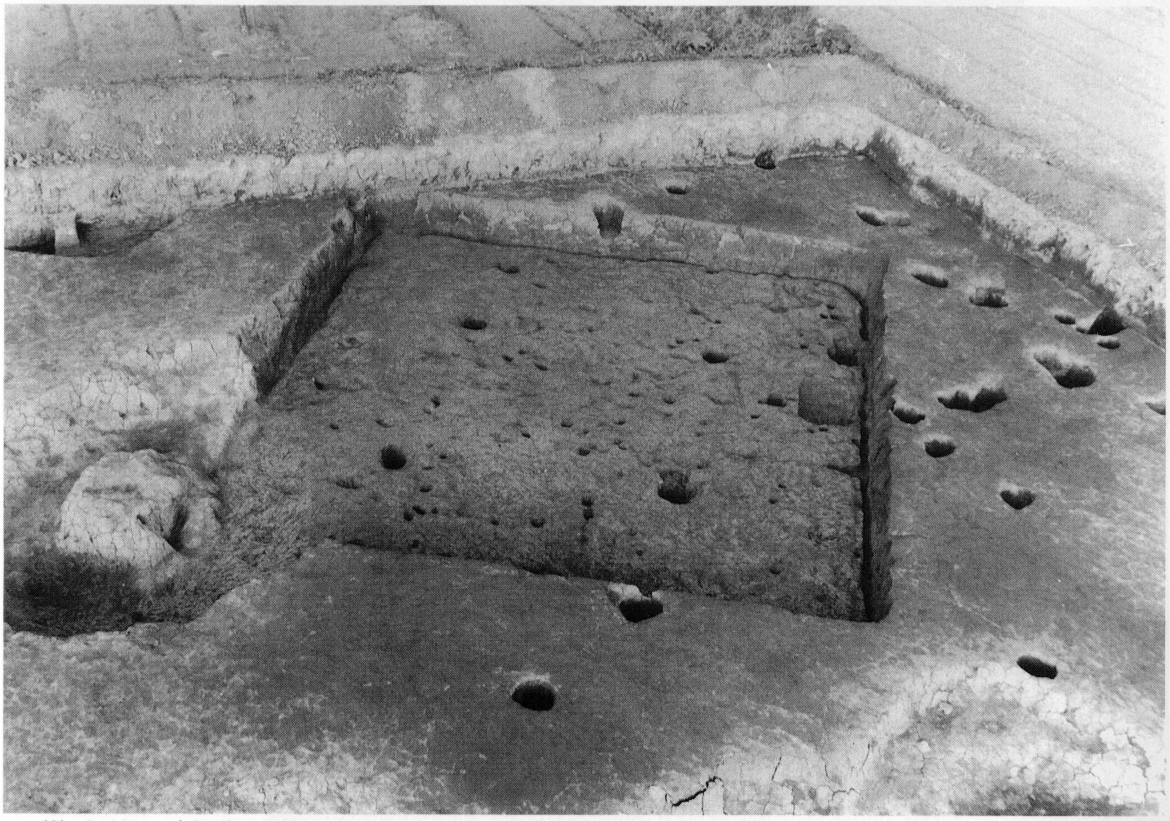
(1) 久富鳥居遺跡・遠景
（気球写真　北から）

(2) 久富鳥居遺跡・全景
（気球写真　真上から）

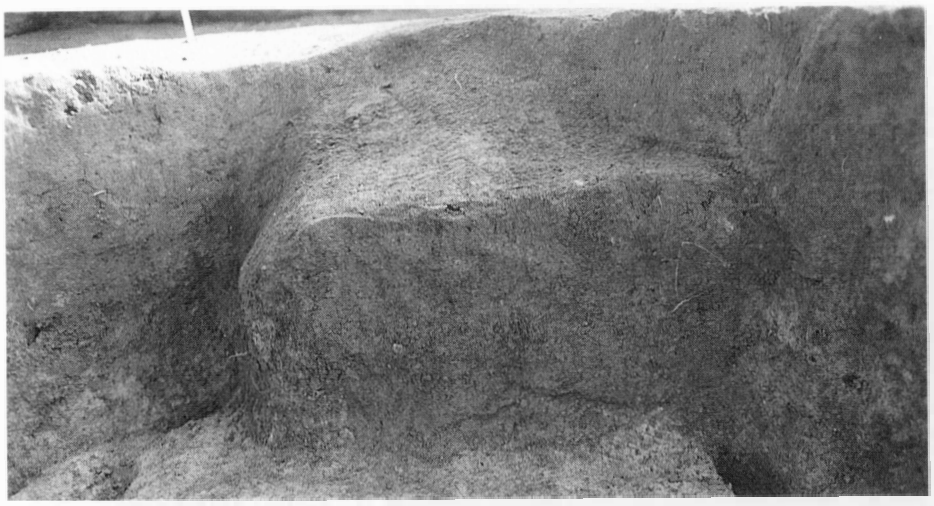
図版２



（1）SI030　床面検出状況（東から）



（2）SI030　完掘状況（南から）



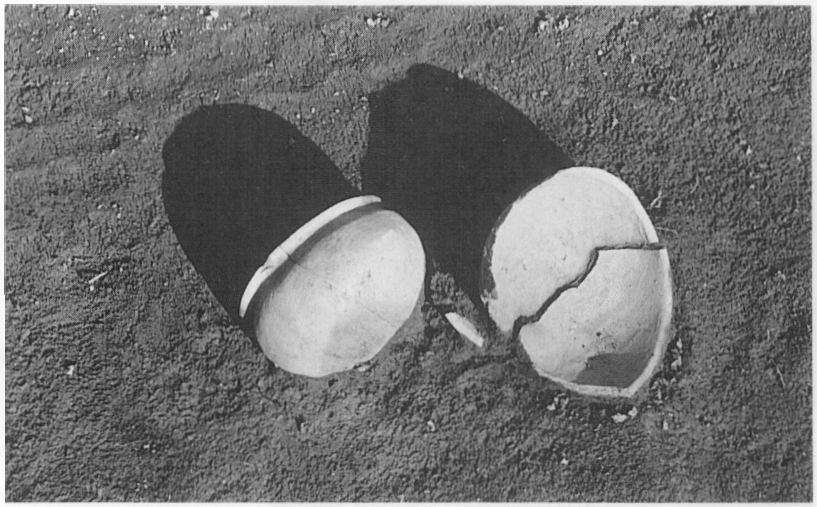
(1) SI030
段差状遺構北側（南から）

(2) SI030
段差状遺構南側（西から）

(3) SI030
土器出土状況'（南から）

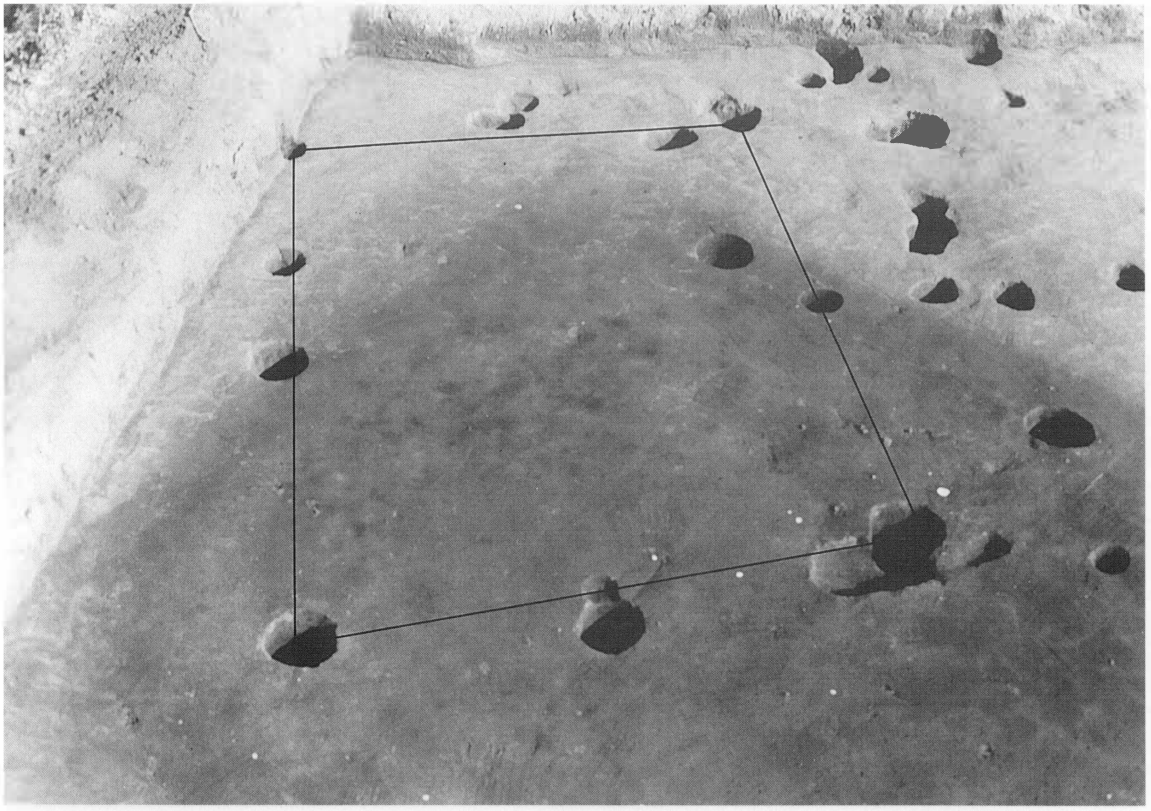
図版４

(1) SK129 （SI030床下）
土器出土状況（西から）



(2) SI030
土器出土状況（南から）

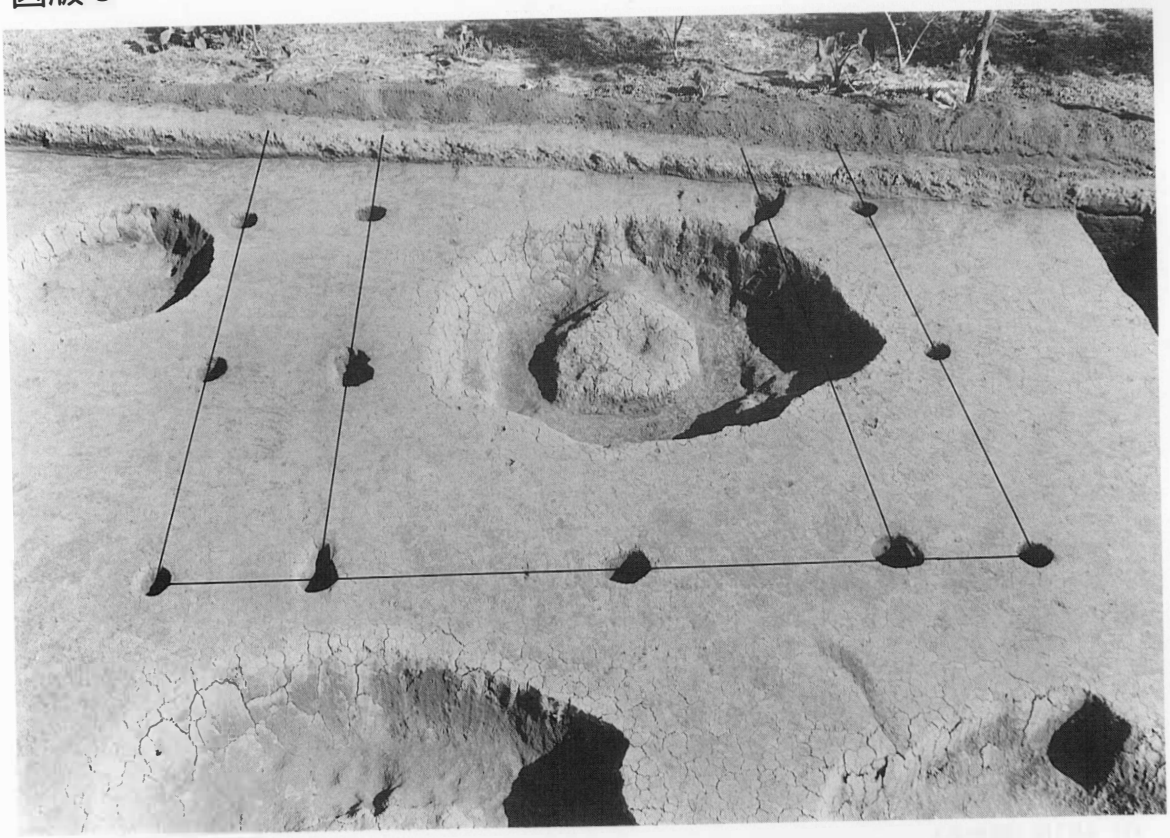
(3) SI030
鉄製品出土状況（北から）



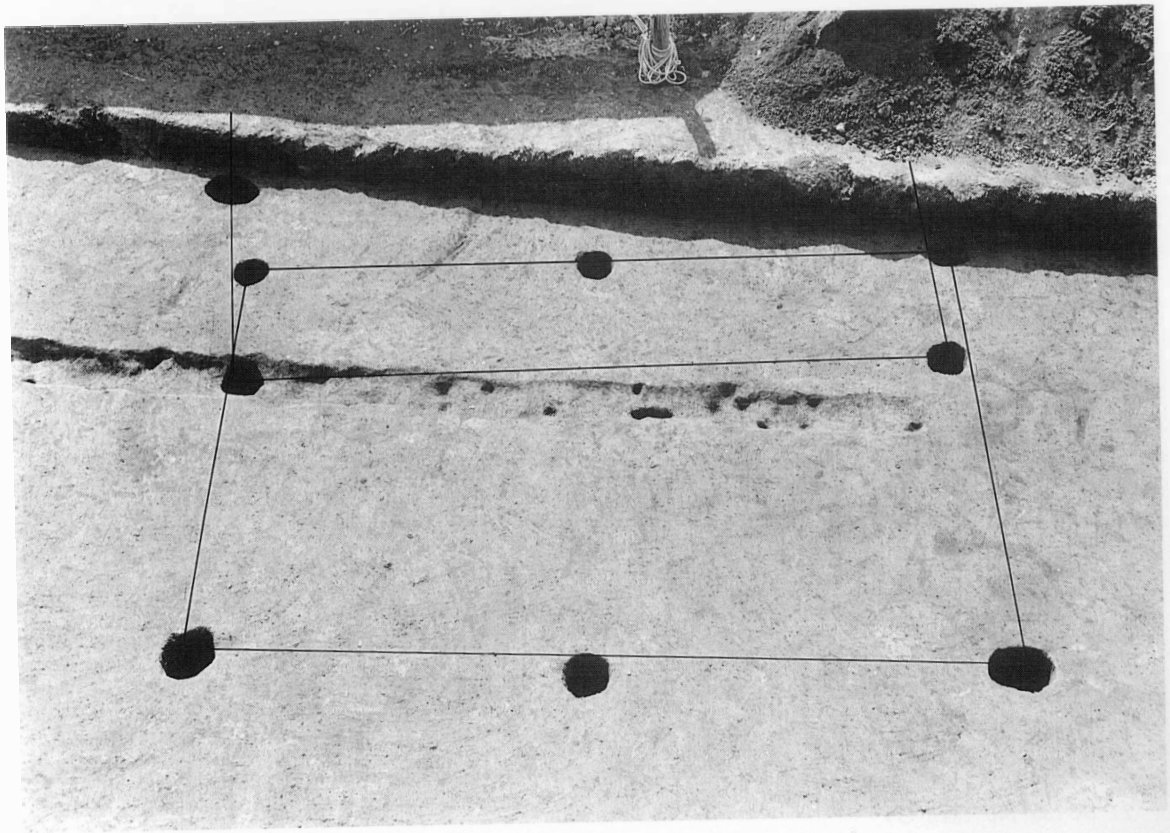
(1) SB110（西から）

(2) SB130・140（西から）

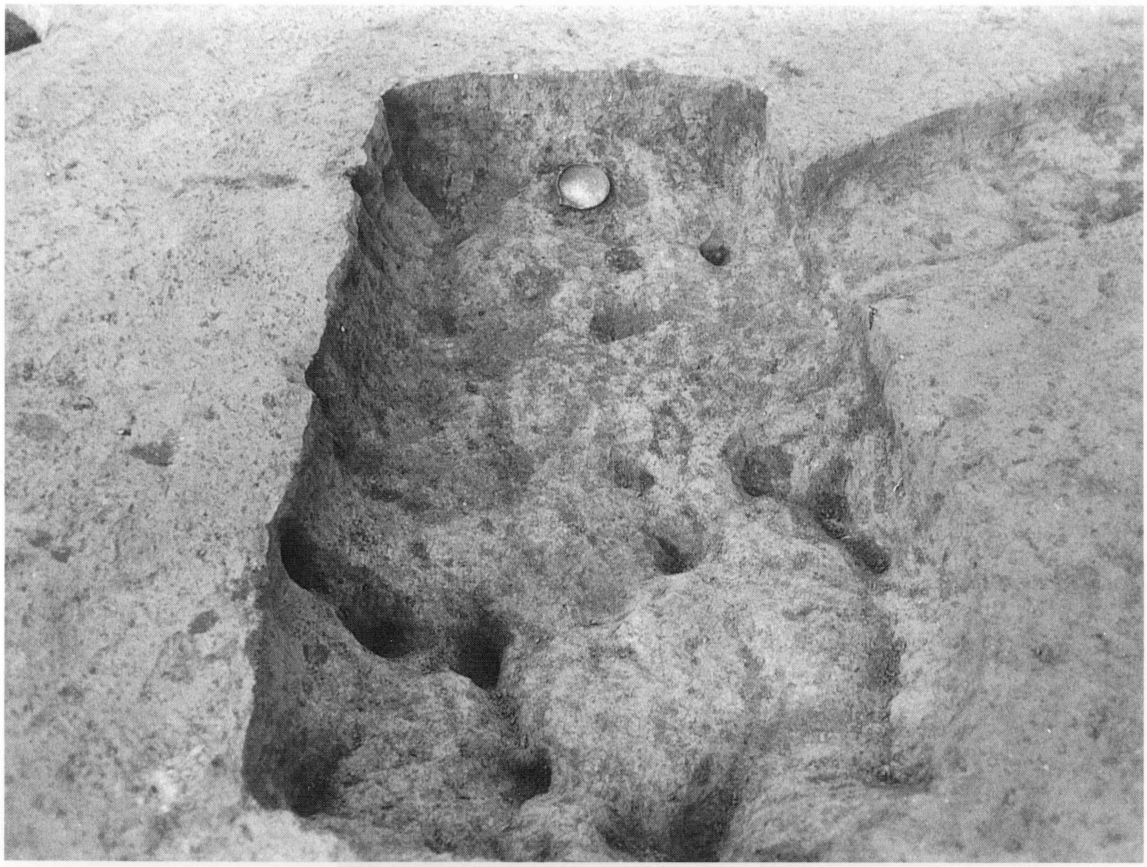
図版６



(1) SB150（西から）

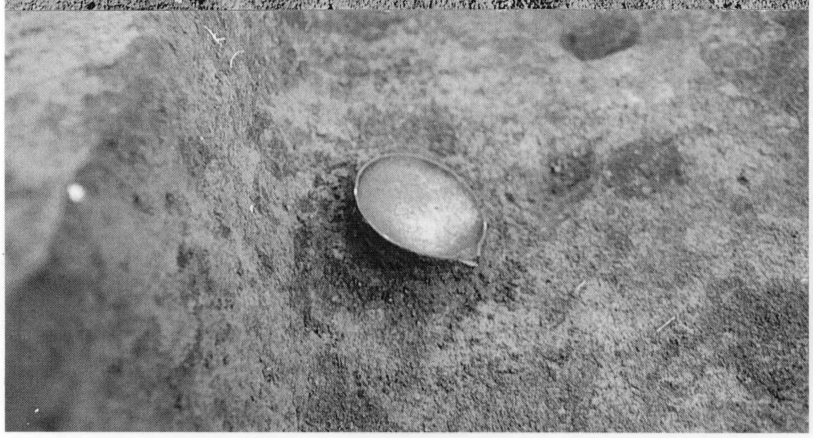


(2) SB120・160（北から）



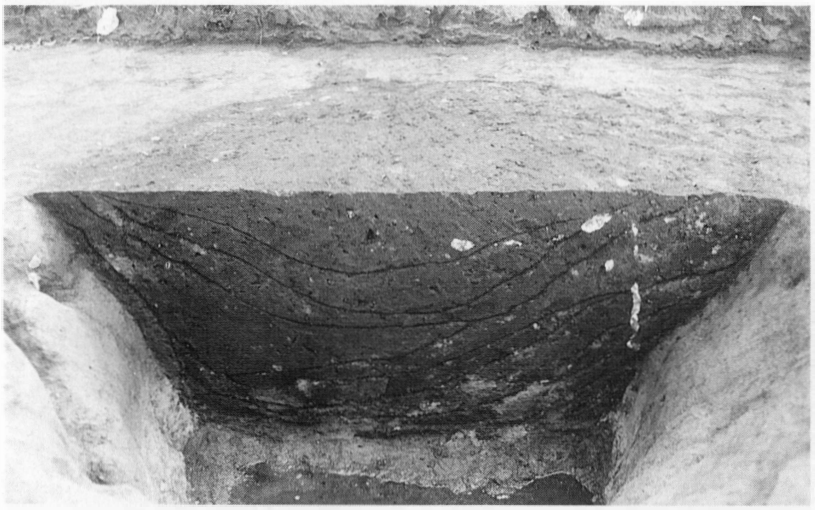
(1) SK071（南から）

(2) SK071
土器出土状況（真上から）

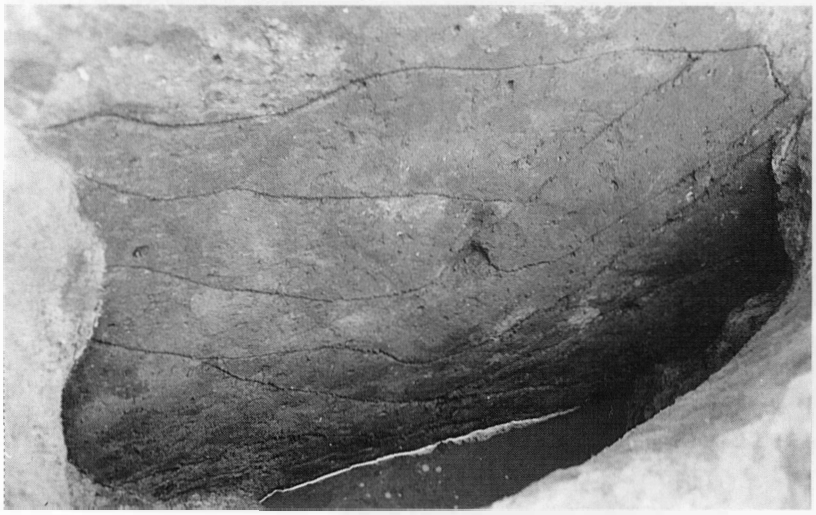


(3)　同　（西から）

図版8



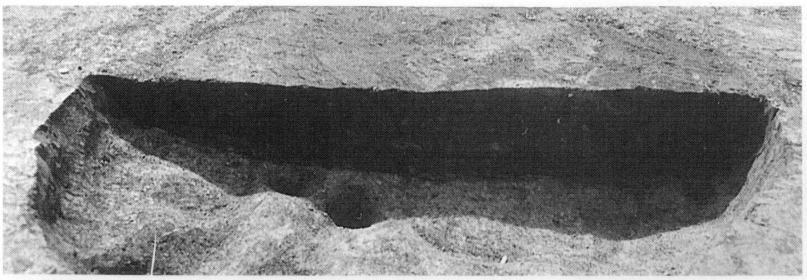
(1) SE040 土層観察（西から）



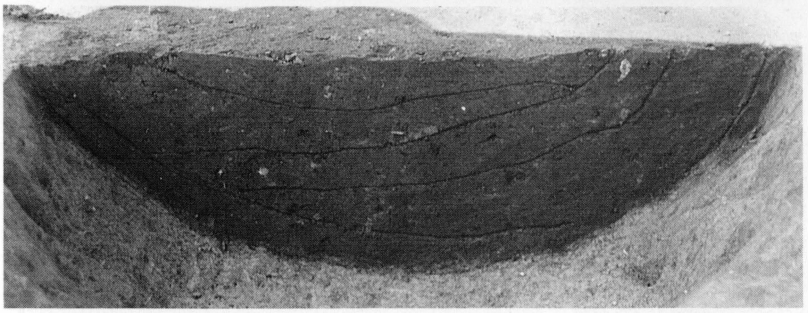
(2) SE084 土層観察（南から）

(3) SK021 土層観察

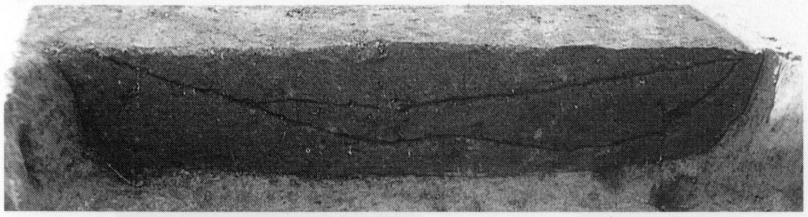
(4) SK022 土層観察



(1) SK023 土層観察

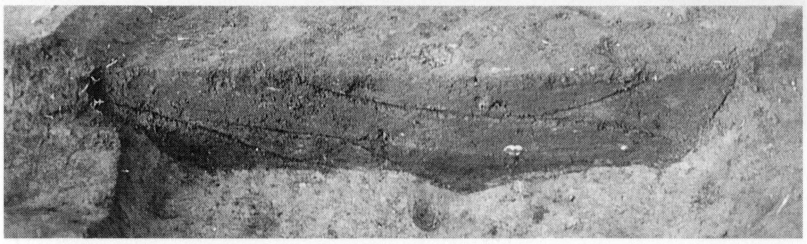


(2) SK028 土層観察



(3) SK068 土層観察

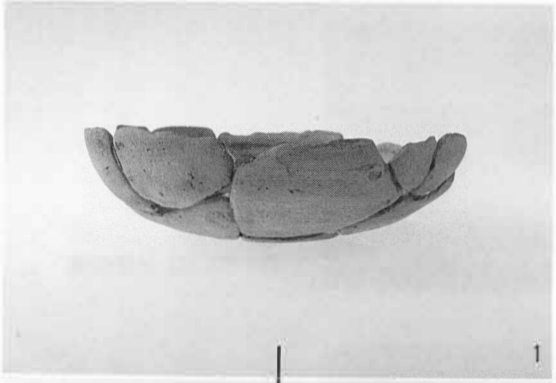
(4) SK069 土層観察

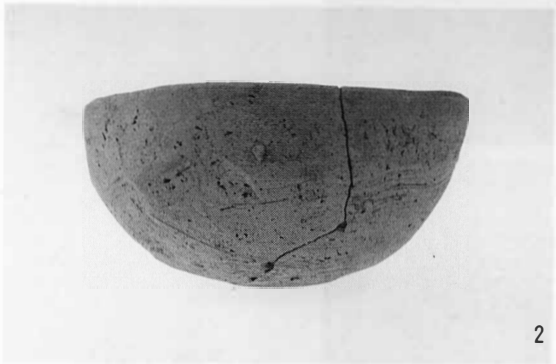


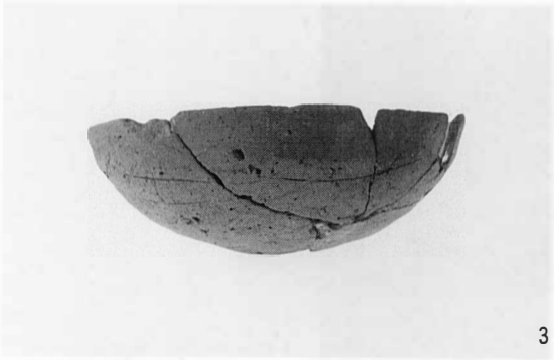
(5) SK072 土層観察

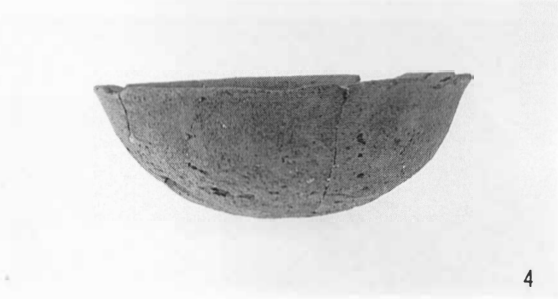
(6) SK073 土層観察

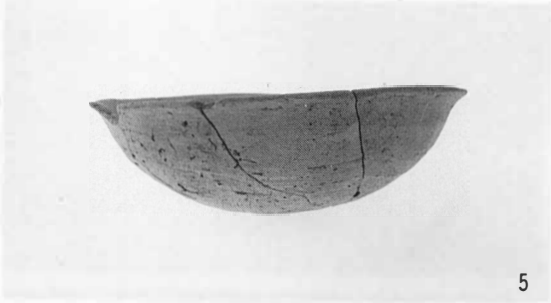
図版10

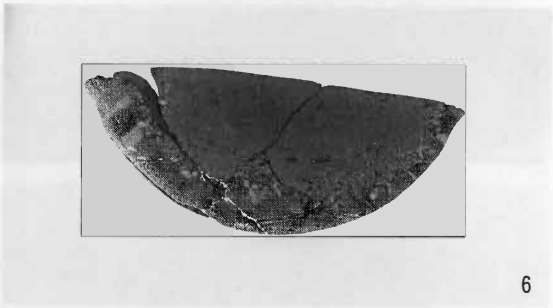

1

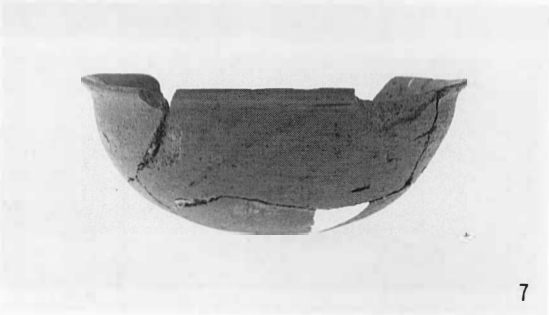

2

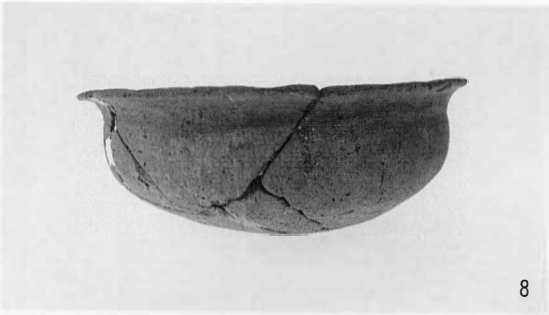

3


4


5


6

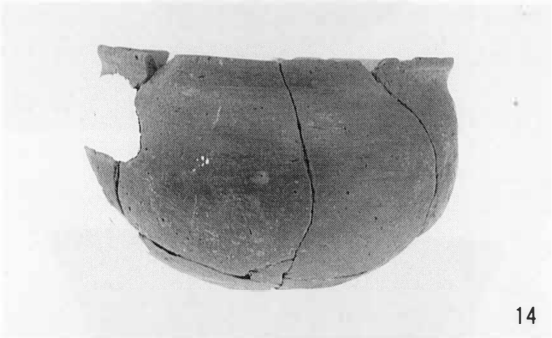

7

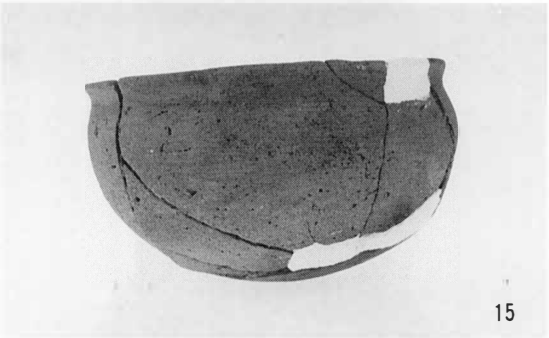

8

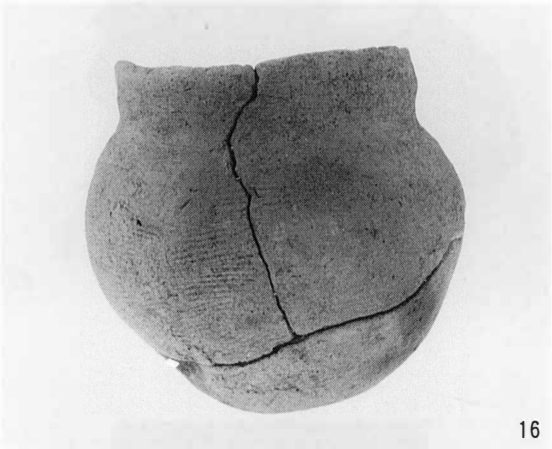
SI030 出土土器

9

13


14


15


16

17

18

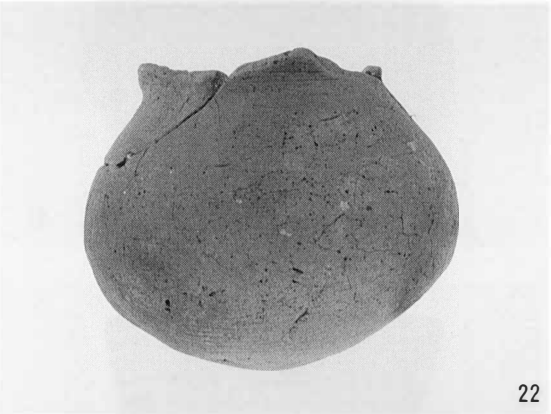
19

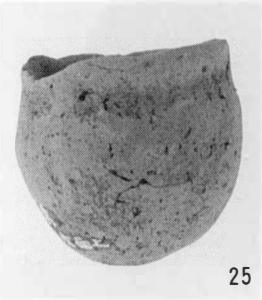
SI030 出土土器

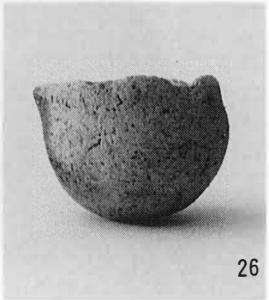
図版12

20

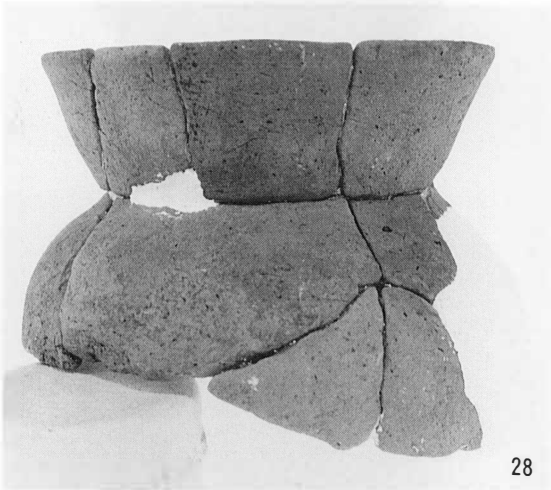
21


22


25

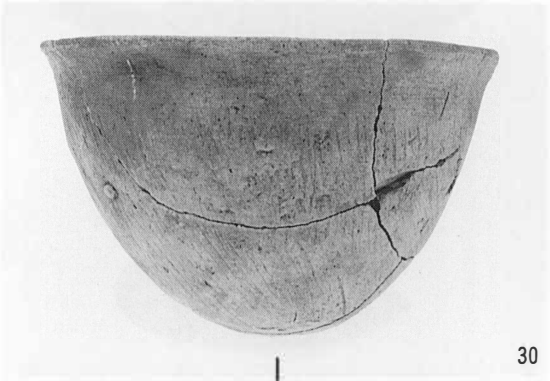

26

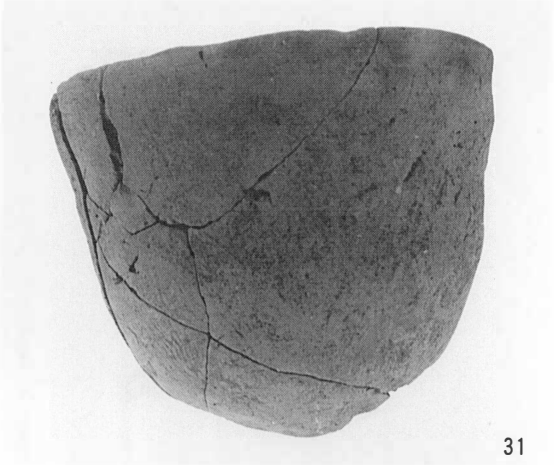
27

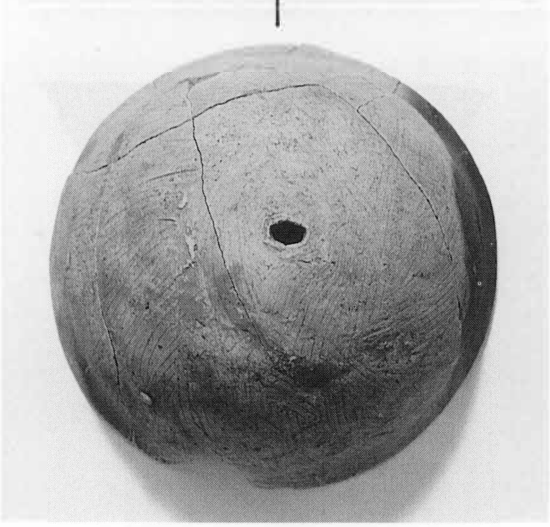

28

29

SI030 出土土器


30


31



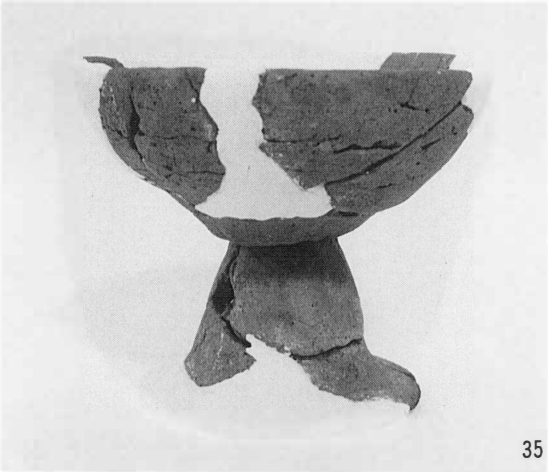
32

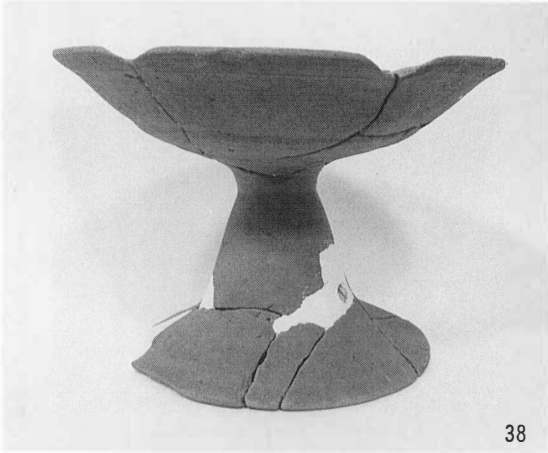
33

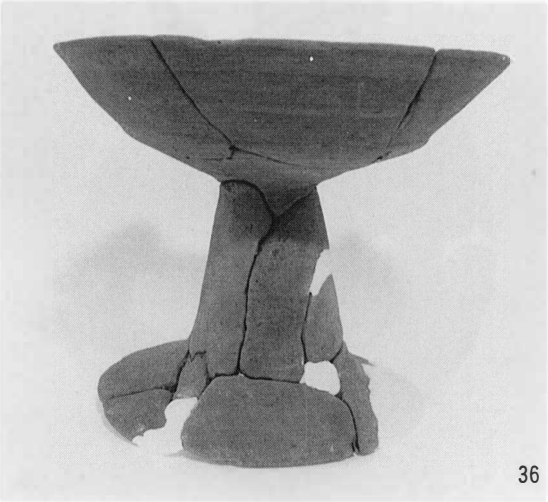
34

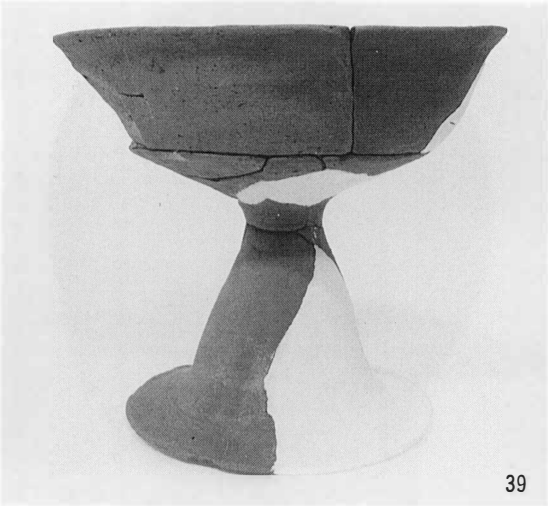
S1030 出土土器

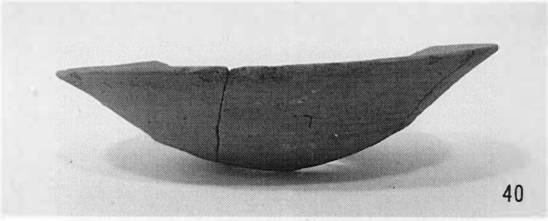
図版14


35


38


36


39

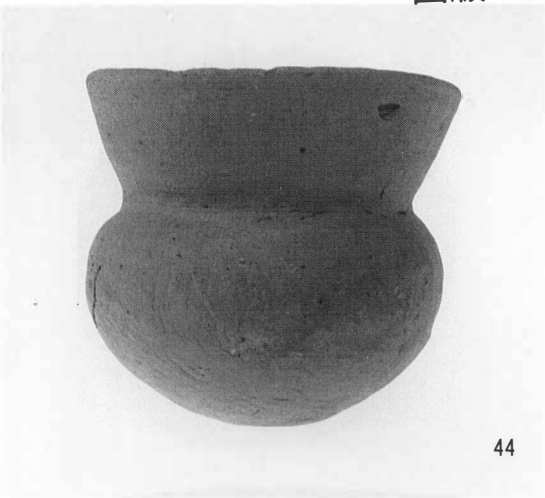

40

37

42

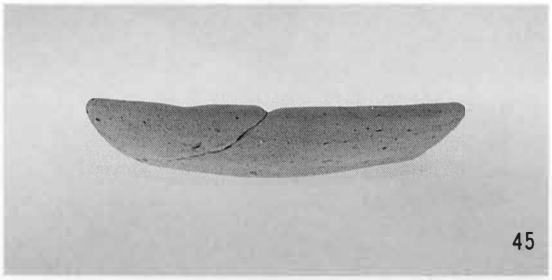
SI030 出土土器

43



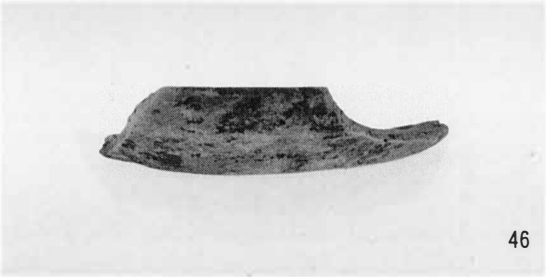
44

SK129 出土土器



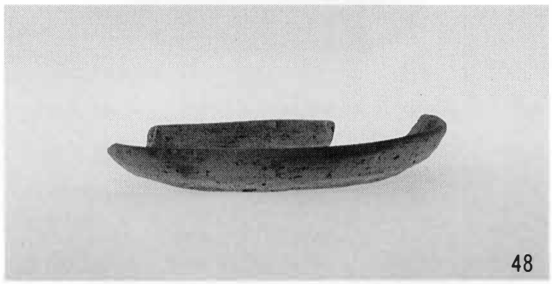
45

SB130－P7 出土土器



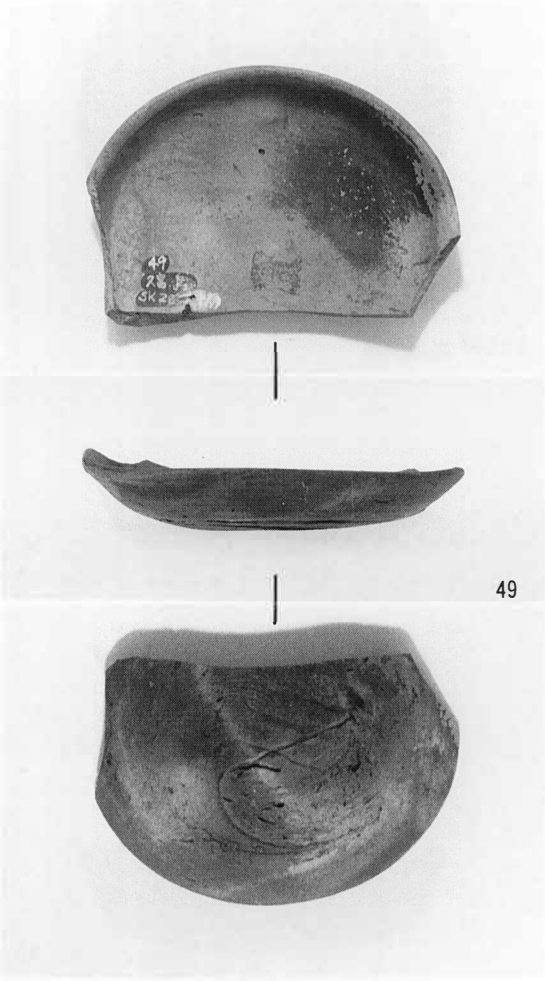
46

SB160－P3 出土土器



48

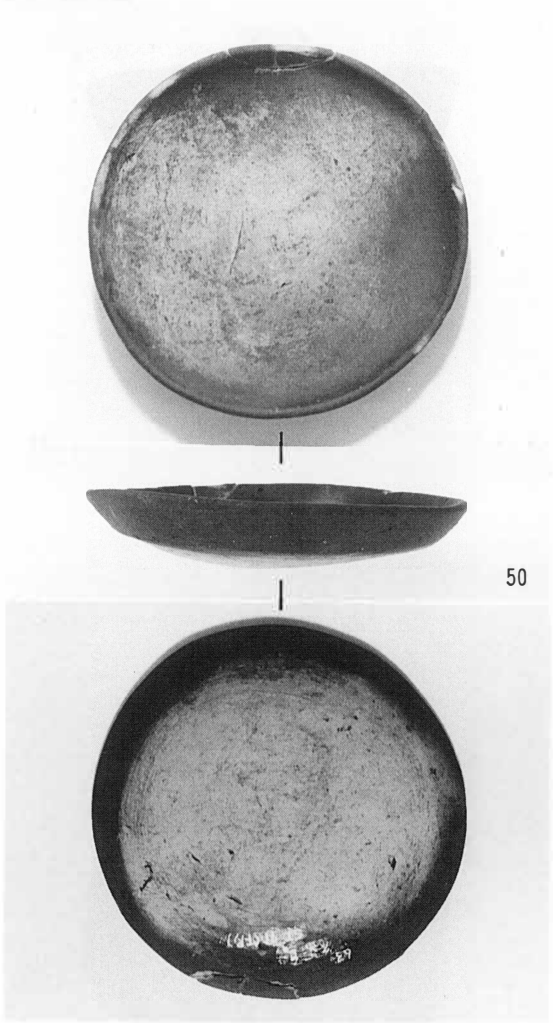
SK067 出土土器



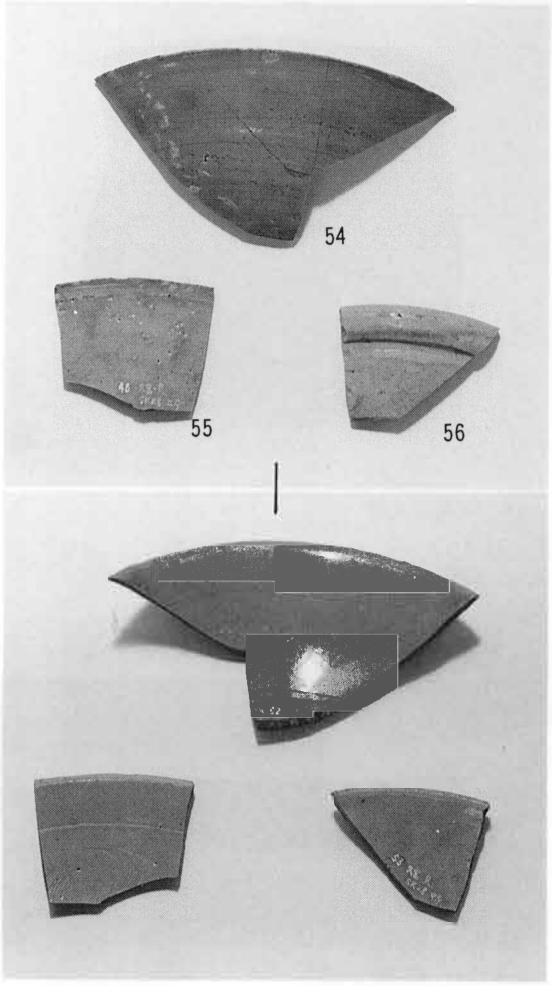
49

SK028 出土土器

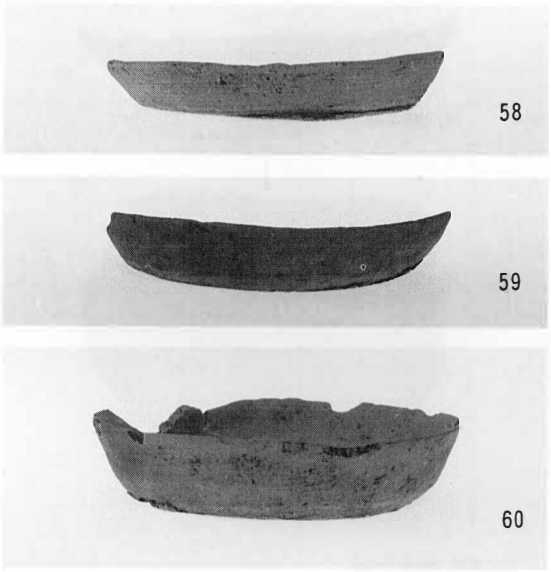
図版16

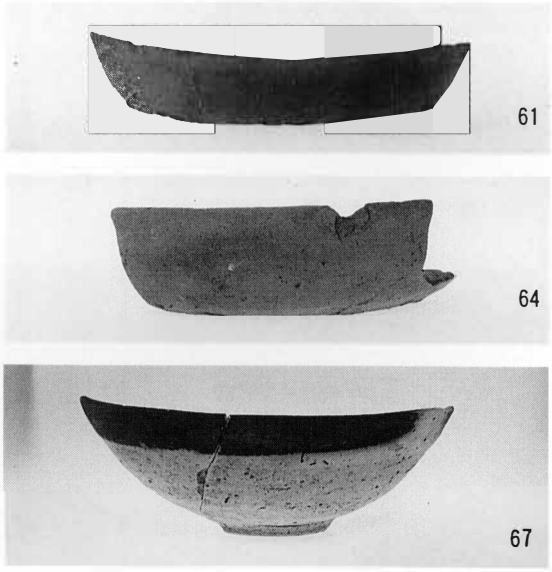


SK067 出土土器



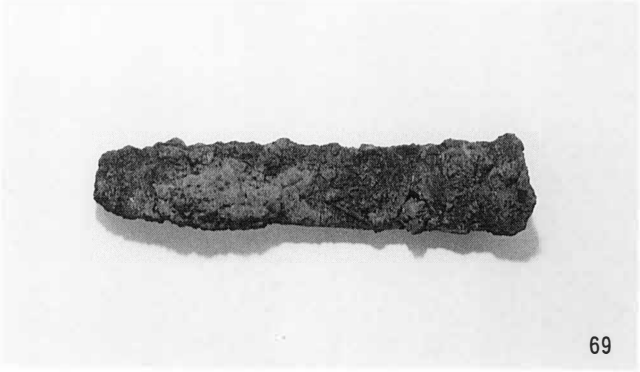
SK028 出土土器





溝、ピット出土土器

68



69

鉄製品及び石製品

70

久富鳥居遺跡

筑後市文化財調査報告書

第13集

平成6年3月22日

発行　筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井898

印刷　山下プリント
筑後市大字熊野1848－6